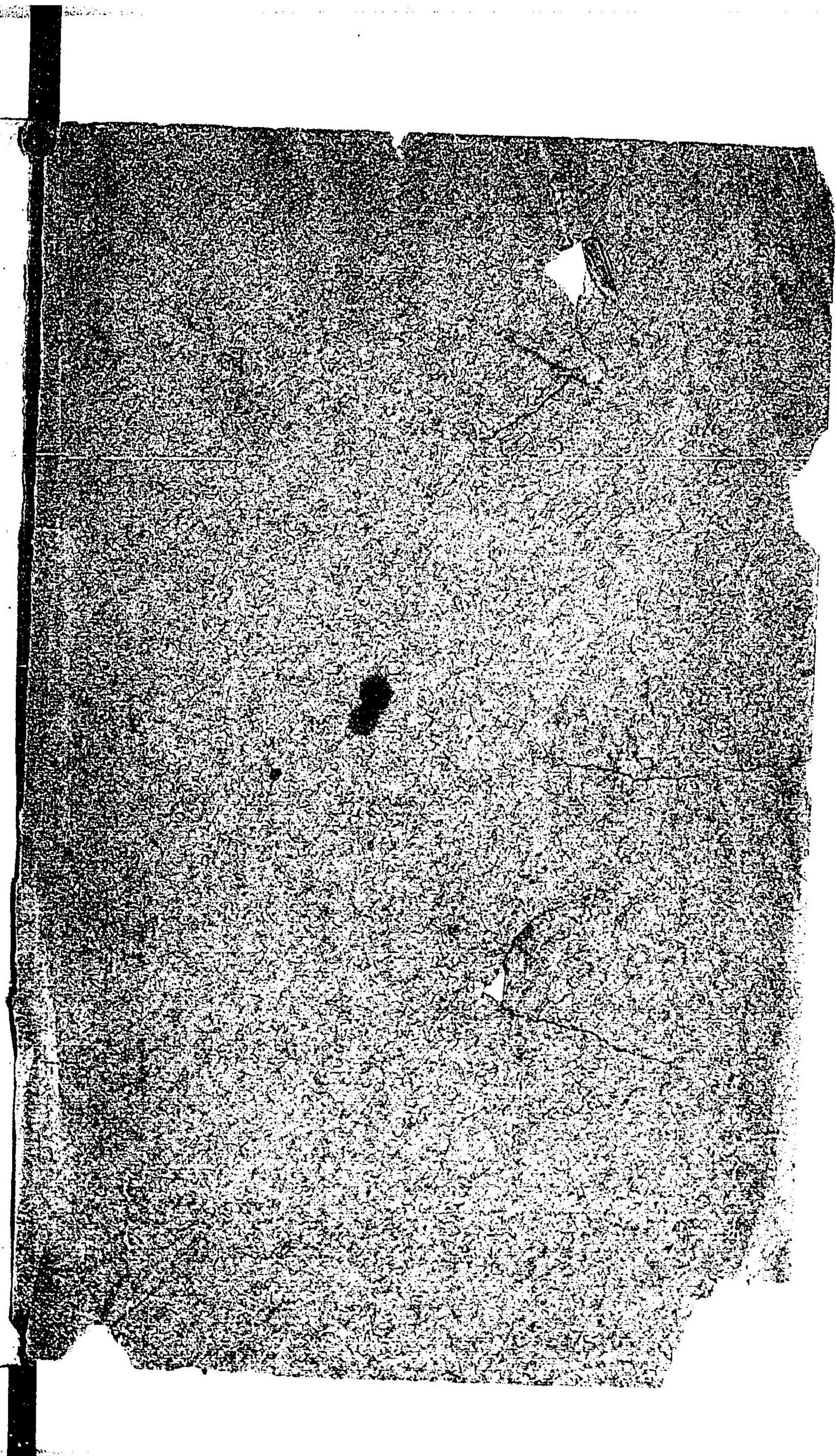
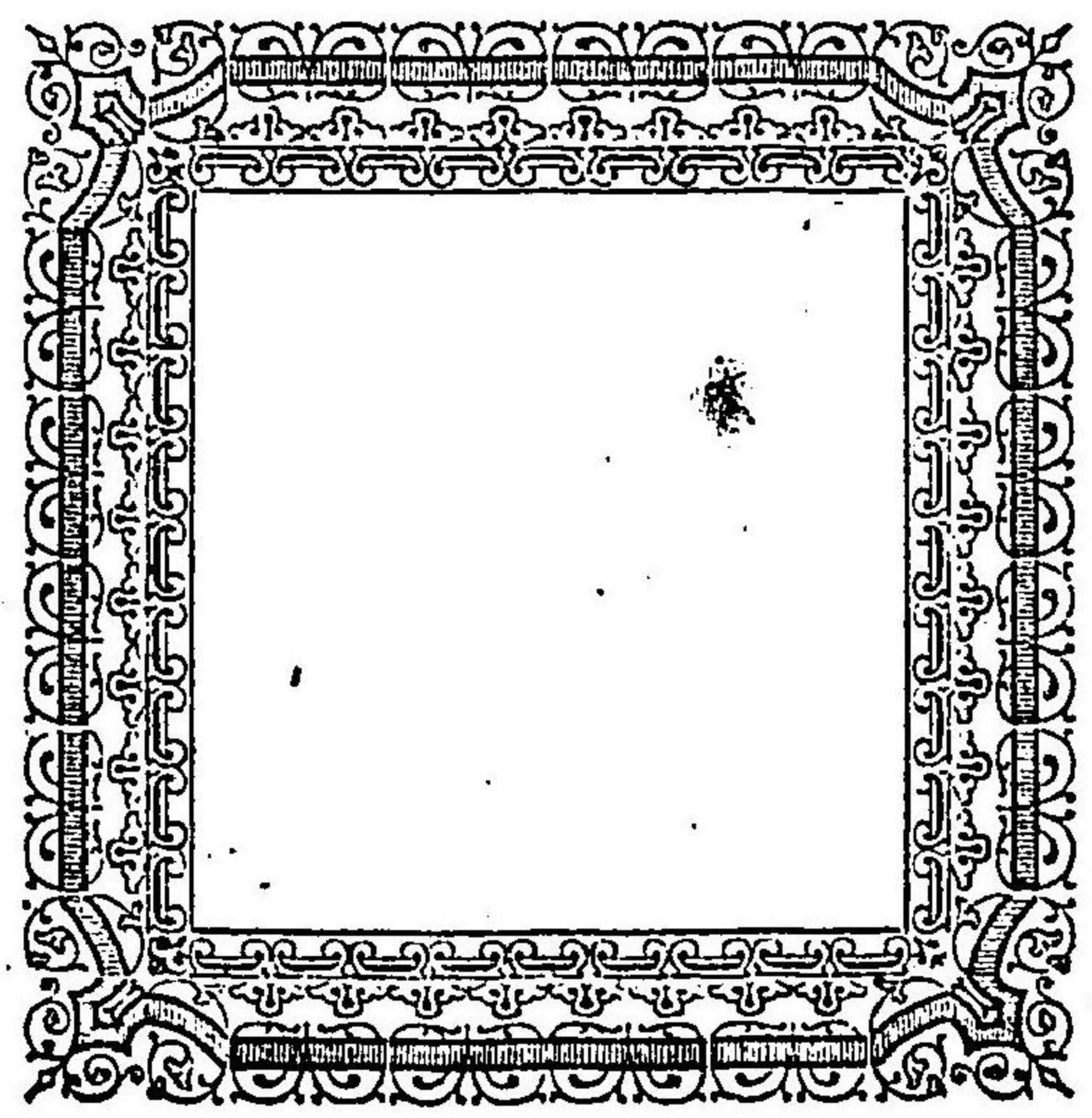


大日本
帝國
憲法義解
全

附 皇室典範、議院法、衆議院、選舉、會計法、貴族院令

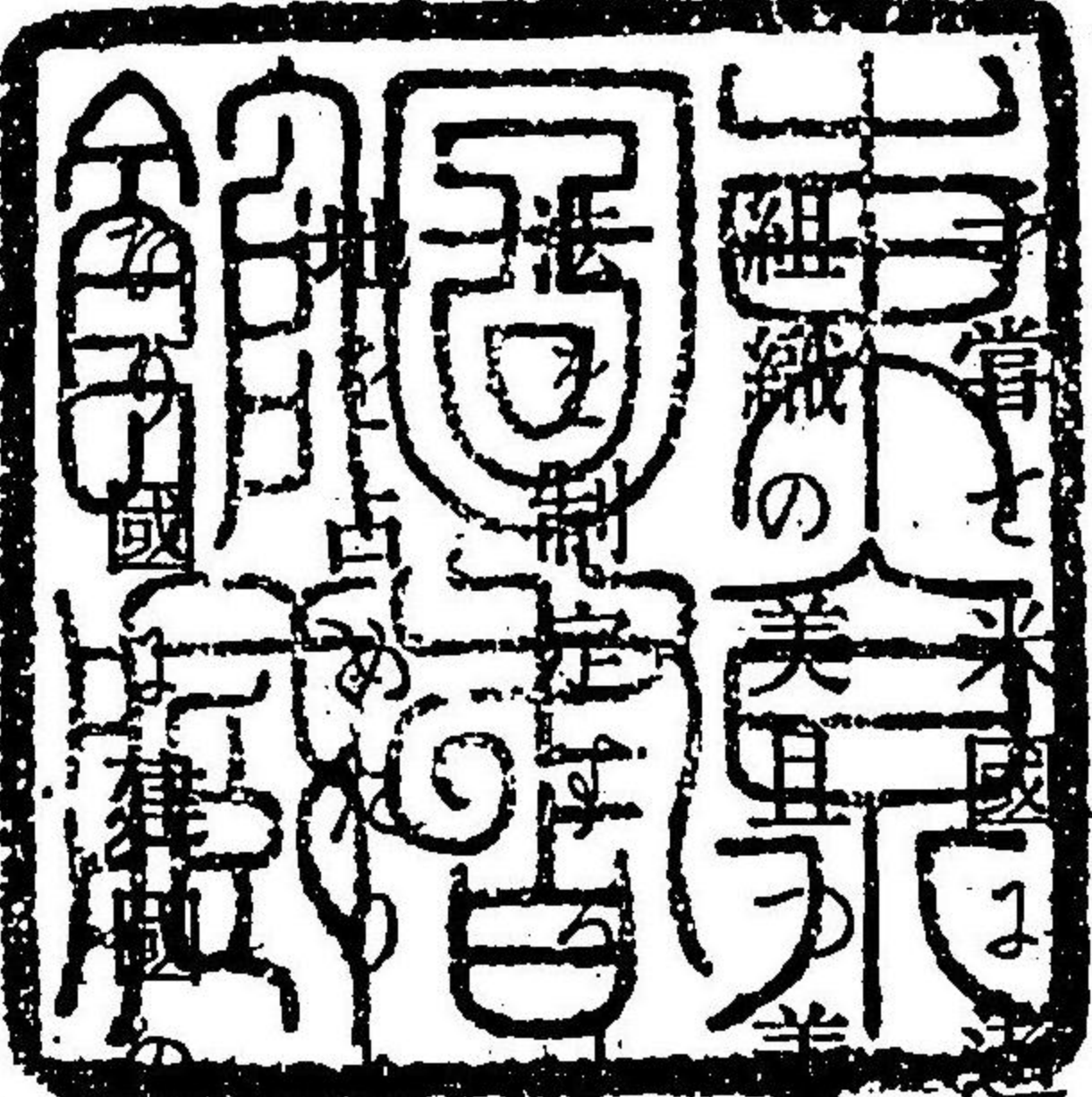
橫濱法律學校發兌

樞密院議長伊藤伯秘書官
米國法律學士 從五位 金子堅太郎君序
內閣文官試驗局試驗委員 日本法律博士
橫濱始審裁判所長 英國狀師 從六位 岡村輝彦君 校閱
橫濱始審裁判所判事 金山尚志君 ○金子辰三郎君 合著



№16/66

大日本帝國憲法義解序



嘗て米國は選舉せしとき其憲法を研究し其精神及
 組織の美且つ善なるを觀て心竊かゝ以爲く米國ハ憲
 法を制定するに當り他國ハ比類なき一種天賦の好位
 抑米國ハ一の未開國なり一の殖民地
 基礎なく俗ハ慣習の典例なく其民ハ
 本國に於て宗教上の壓制ヲ忍びず社會上の不平ヲ堪
 へず流離顛沛して絶海の不毛を開拓し各種の人民相
 集て終一團體をなしたる者なり故に米國獨立の時
 十三州の人民が相集り相議して憲法を制定するに當

りて建國基礎の遵奉すへきものなく歴史上習慣の保守すへきものなく全く十三州人民の理想的より憲法を制定したるものなれば之を憲法上の學理より論ずるも又之を實地上の作用より議するも實は完全無欠の憲法と云はざるを得ず然れとも是決して他の諸國は於て望むへりらざる所として米國十三州の人民は占有せし一種特別の樂境なりと謂ふへり顧みて歐州諸國は憲法を制定したる所以の情況を察するに多くは彼の千八百四十八年革命の餘波は逆卷りれ人民喧囂の聲は強迫せられ風潮の刺激は抵抗するものと能は

ず自由の壓力は屈服せられて一時人民の希望を満足せしめんり爲し制定したるものなれば其憲法は於て古來其國建國の基礎を遵奉せんと欲するも之を決行するものと能はず又歴史上の慣習を保守せんと欲するも之を處斷するものと能はず只當時人民は狂奔妄信する英國の制度は模擬して寄せ來る社會風潮の浪を防ぎ呼び叫ぶ人民自由の聲を鎮めたるものなり故し其制定したる憲法は今日より之を觀れば建國の基礎を鞏固よせず慣習の典例を保存せず一時外部の刺撃は由て之を組立て又は裝飾したるに異ならず是を以て

其國の歴史上より之を論ずるも又憲法の學理上より之を説くも隨分不備缺乏の點ある處を免れざるなり

夫れ斯の如く米國ハ全く建國の基礎もなく習慣の典例もなかりし故に憲法の原理ニ依り理想的と作用的との比較を以て斯る完全なる憲法を制定する處を得たるなれども歐州諸國ハ建國の基礎もあり古來の慣習もありなり之を憲法中ニ編入する處と能はざりしハ全く彼革命の餘波の然らしむる所なりしなり米國の如き完全無欠なる憲法ハ不毛未開の國土ニ

あらざれば豈ニ敢て之を望むべけんや歐州大陸の如き人民の喧囂ニ依て創定したる憲法ハ數千年來建國の基礎ある國家ニ於てハ豈敢て之ニ倣ふ處を欲せんや故ニ我大日本帝國の憲法ハ文武叡聖なる

天皇陛下の欽定し給ふ所にして神武天皇以來皇統連綿として二千五百有余年ニ及び世界万国廣くと雖も其比類なき一種特別なる建國の基礎を憲法の柱石とし維新の始め發せられたる五ヶ條の御誓文及明治十四年の國會開設の勅諭を墻壁とし傍ら歐米諸國憲法の原則に依て之を構造し泰西文明の壇上ニある憲法

六
學士の論説を以て之を裝飾せられたる如し今之を
例せし宛も大和錦を經とし泰西文明の綺羅錦繡を緯
とし織出せる一種の錦織にして和洋調合の彩色粲然
として國光を宇内し揚輝すると云ふも過賞しあらさ
るなり是れ即ち本邦憲法の大体の採長補短の精神を
基き首尾貫徹し以て我邦の尊嚴なる國体を維持永續
するの主眼あり是を以て皇室の尊嚴ハ益々其光威
を發し政府の主義ハ益々其進路を明し臣民の權利
ハ益々其根本を堅ふせり苟も日本臣民たる者誰り
聖徳の至仁至愛なるを奉戴せざる者あらんや然りと

雖も憲法の字句ハ簡短にして多くハ憲法學の熟語を
用ひたり故し十分其意味を了解せんと欲せし宜しく
平易親切なる注解を要せざるを得ず近頃予り二人の
學弟平易なる文字を以て憲法の正文を注解し來て予
し其序を求む依て聊予り所感を略述して序し代ふと
云爾

明治二十二年二月

米國法
律學士 從五位勳五等金子堅太郎撰

大日本帝國憲法義解序
予ハ常に法理を執て事の曲直を判する任を
帶るものあり故に社會の空合政治の雲行に
ハ頓と意を留むるの違ふかり去に明治も早
や廿二は歳を重ね積れる雪に埋れる櫻ハ春
暖の遲きを恨みつゝあるにも拘らず政界ハ
陽氣ハ何時去か東瀛の公園に春色を萌じ二
月初めの頃に至てハ世間一層賑ハ去く黙坐
世事に頓着せざる予の如きものを去て此賑
ハしさハ抑何事あるかと疑ハしむるに至り

こゝを世間に問ひ始めて憲法發布盛典を祝するの準備あることを確めたり因て謂へらく今日の人心ハ如何に結構ある憲法を得るの豫算ありて狂奔するものあるか顧ふに我邦の憲法ハ民約にあらずして欽定に成りたるものなれハ吾人に何程の権利を授け給へるか又幾千の自由を與へ給へるか蓋世間の人とにして之を明知志たるものおかるべきに人も狂すれハ吾も狂するものぶ如く所謂夢我夢中にて東奔西走漫りに祝典の準備を

爲すとの餘り輕擧の沙汰あらずやと然るに二月も十一日と云ふ吉辰にありぬれハ辱くも
皇帝陛下ハ官中に於て憲法授與式の盛典を擧げさせ給ひ不肖輝彦の如きも亦其式場に參列するの榮を辱ふすることを得て始めて大日本帝國憲法の成章を拜讀するの幸運に遇へり而して之を通閲するに至て忽ち予か數日已來懷抱去居たる日本人民ハ輕擧なりとの誤斷ありしを悟り更に其先見の明あり

しに敬服志たり謹みて本邦の憲法を概評す
れハ徒らに外國ニ新奇を採らす斷じて日本
固有の國体を基礎とせられ上ハ建國以來の
大典に倣ハせ給ヒ皇位ニ安泰を千載不磨に
垂れ下ハ臣民の權利自由を永遠不朽に保明
し給ヒ以て新たに議會を創設せらる實に結
構ある立憲政体を築られたるものと謂へし
予嘗て英國に遊ヒ毎に彼の國民ハ誇稱する
の言を聽くに曰く英國の憲法ハ英國の慣例
を漸次に集め積るものありと蓋憲法を

四

して國体の如何を顧とす徒らに外國憲法の
文字を移し來り其風俗民情に適せざるもの
たら止めは其憲法ハ國家を經營維持するの
國憲にあらすまて獨無用の空文たらんのみ
看よ世人ハ土兒格の憲法を評まて空文の憲
法と嘲るを我邦の憲法を誦讀するもの誰か
是を不祥の語を以て批評を試むるものあら
んや叙まて此に至り予ハ先見の明ある人ト
ハ此の金玉は憲法に對ま何故に更に幾層の
賑ひを爲さとりしやを怪むなり今や一步を

五

進めて恭く

六

皇帝陛下の憲法を欽定せられ吾人に誓ハセ給へるの聖旨を察じ奉るに實に國家の隆昌と臣民の慶福とを企圖し給ひ日本臣民ハ已に立憲政体の下に立ち國家を保持することゝを負擔するに堪るを疑ハセ給ハざるに在り其勅詔ハ畏れ多くも今尙ほ予カ耳底に存す惟ふに其聖旨に答へ奉り此憲法をじて益々光輝を發揚せしむるハ獨り臣民の技倆何如に存す其責任豈重く且大ならずや而して予

ハ沈重多能ある我日本の臣民果して此聖恩を空ふせざらんことを信す然りと雖世人悉く憲法學に通するの學者にあらず況や我憲法の如きハ其構成組織大に泰西の憲法と精神を異にする點なきにあらざるに於てをや是即ち正格ある註釋を要する所以あり頃者金山金子の二氏我邦憲法の各條を解義し來り予に校閱を求めらる予カ職繁ありと雖亦二氏の請ひを空ふすへからず因て之を校査し終に所感を卷端に記し以て序文に代ふと

七

云爾

明治廿二年春陽

梅花綻ふる日

法學博士 岡村輝彦識

八

凡例

- 一本書ハ平易ニシテ簡明ナルヲ主トシ敢テ高尚ナル學理ニ涉ルヲ務メス
- 一本書ハ大日本帝國憲法ノ成文ヲ解義スルヲ主眼トスルモノナレハ著者平素ノ持論ト相投合セサルノ點ト雖モ故ラニ意見ヲ加ヘス
- 一本書載スル處ノ諸大家ノ學說ハ殊ニ其要ヲ摘ムニ止メ甲說乙說或ハ第一說第二說等ノ號ヲ記シ一々諸大家ノ氏名ヲ記セス
- 一本書ハ每條各國憲法ト對比セス殊ニ其必要ト認ムルモノハ之ヲ引証シ以テ讀者ノ參照ニ供セリ
- 一各條立法ノ精神ハ可及的之ヲ探リタル積リナレモ著者ノ淺識ナルト著書ノ簡略ナルトニ依リ讀者ニ疑問ヲ生スルノ點アラハ幸ニ質議ヲ咨セスシテ可ナリ

明治廿二年三月

著者誌

告 文

皇朕レ謹ミ畏ミ

皇祖

皇宗ノ神靈ニ誥ケ白サク、皇朕レ天壤無窮ノ宏謨ニ循
ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ、舊圖ヲ保持シテ敢テ失墜スル
コト無シ、顧ミルニ世局ノ進運ニ膺リ、人文ノ發達ニ隨
ヒ宜ク

皇祖

皇宗ノ遺訓ヲ明徴ニシ、典憲ヲ成立シ、條章ヲ昭示シ、内
ハ以テ子孫ノ率由スル所ト爲シ、外ハ以テ臣民翼賛ノ

道ヲ廣メ永遠ニ遵行セシメ益國家ノ丕基ヲ鞏固ニシ
八洲民生ノ慶福ヲ増進スヘシ茲ニ皇室典範及憲法ヲ
制定ス惟フニ此レ皆

皇祖

皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ
外ナラス而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコト
ヲ得ルハ洵ニ

皇祖

皇宗及我カ

皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ皇朕レ仰テ

皇祖

皇宗及

皇考ノ神祐ヲ禱リ併セテ朕カ現在及將來ニ臣民ニ率
先シ此ノ憲章ヲ履行シテ愆ヲサラムコトヲ誓フ庶幾
クハ

神靈此レヲ鑒ミタマヘ

憲法發布勅語

朕。國家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣榮トシ
朕カ祖宗ニ承クルノ大權ニ依リ現在及將來ノ臣民ニ
對シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス
惟フニ我カ祖我カ宗ハ我カ臣民祖先ノ協力輔翼ニ倚
リ我カ帝國ヲ肇造シ以テ無窮ニ垂レタリ此レ我カ神
聖ナル祖宗ノ威徳ト竝ニ臣民ノ忠實勇武ニシテ國ヲ
愛シ公ニ殉ヒ以テ此ノ光輝アル國史ノ成跡ヲ貽シタ
ルナリ朕我カ臣民ハ即チ祖宗ノ忠良ナル臣民ノ子孫
ナルヲ回想シ其ノ朕カ意ヲ奉體シ朕カ事ヲ獎順シ相

與ニ和衷協同シ益我カ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚シ祖
宗ノ遺業ヲ永久ニ鞏固ナラシムルノ希望ヲ同クシ此
ノ負擔ヲ分ツニ堪フルコトヲ疑ハサルナリ

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ朕カ親愛
スル所ノ臣民ハ即チ朕カ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ
所ノ臣民ナルヲ念ヒ其ノ康福ヲ増進シ其ノ懿德良能
ヲ發達セシメムコトヲ願ヒ又其ノ翼賛ニ依リ與ニ俱
ニ國家ノ進運ヲ扶持センコトヲ望ミ乃チ明治十四年
十月十四日ノ詔命ヲ履踐シ茲ニ大憲ヲ制定シ朕カ率
由スル所ヲ示シ朕カ後嗣及臣民及臣民ノ子孫タル者
ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム
國家統治ノ大權ハ朕カ之ヲ祖宗ニ承ケテ之ヲ子孫ニ
傳フル所ナリ朕及朕カ子孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ

循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ
 朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ及之ヲ保
 護シ此ノ憲法及法律ノ範圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全
 ナラシムヘキコトヲ宣言ス
 帝國議會ハ明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ議會開會
 ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トス
 ヘシ將來若此ノ憲法ノ或ル條章ヲ改定スルノ必要ナ
 ル時宜ヲ見ルニ至ラハ朕及朕カ繼續ノ子孫ハ發議ノ
 權ヲ執リ之ヲ議會ニ付シ議會ハ此ノ憲法ニ定メタル
 要件ニ依リ之ヲ議決スルノ外朕カ子孫及臣民ハ敢テ

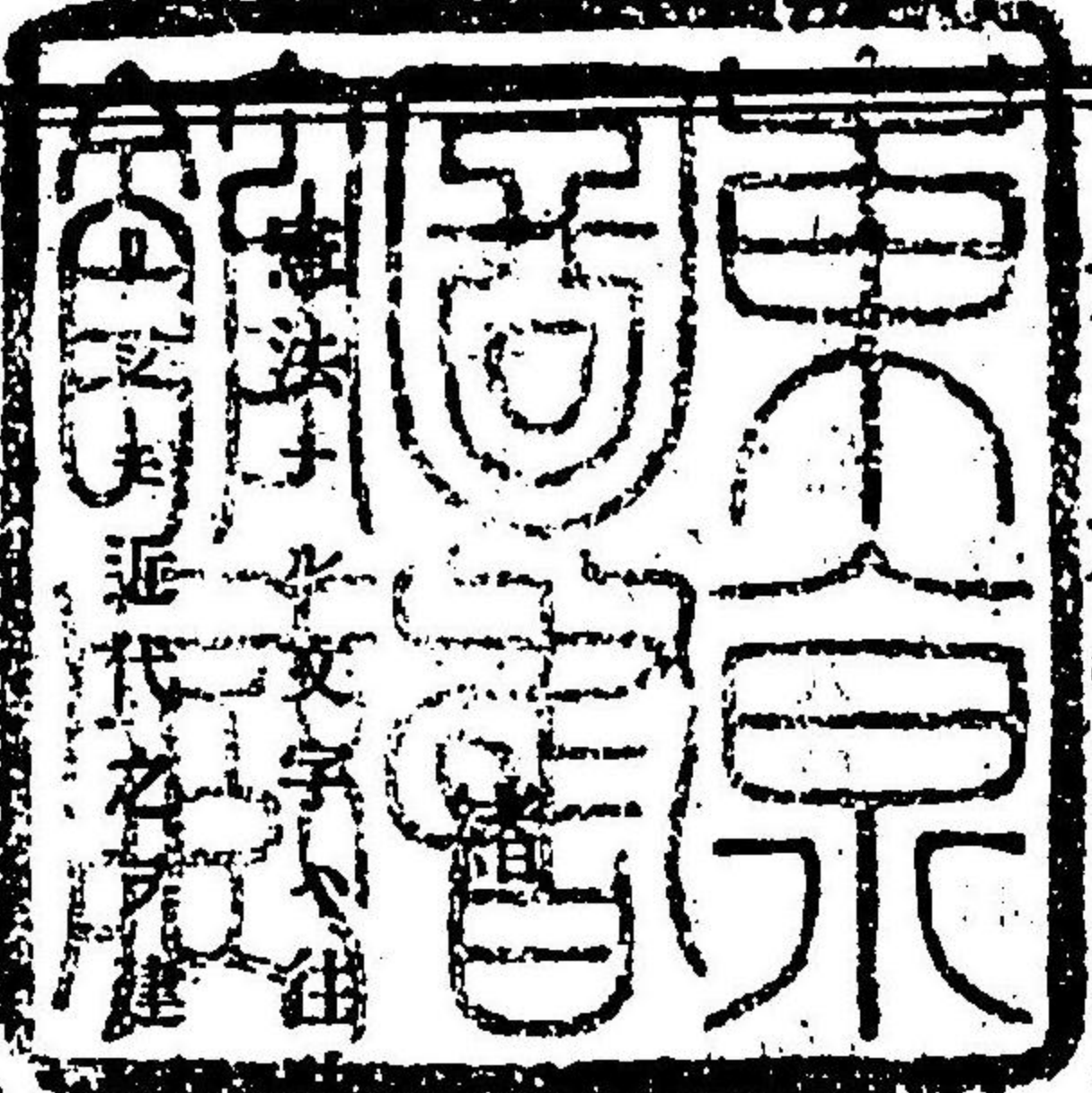
之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ
 朕カ在廷ノ大臣ハ朕カ爲ニ此ノ憲法ヲ施行スルノ責
 ニ任スヘク朕カ現在及將來ノ臣民ハ此ノ憲法ニ對シ
 永遠ニ從順ノ義務ヲ負フヘシ

御名 御璽

明治二十二年二月十一日

- | | |
|--------|--------|
| 內閣總理大臣 | 伯爵黑田清隆 |
| 樞密院議長 | 伯爵伊藤博文 |
| 外務大臣 | 伯爵大隈重信 |
| 海軍大臣 | 伯爵西郷從道 |

特15
743



大日本帝國憲法義解

言

日本法學博士 岡村 輝 彦 校閱
英國狀師 金山 尙 志
始審裁判所判事 金子 辰 三 郎 合 著

憲法ニ於テ文字ハ往時泰西諸國ニ於テ甚々廣キ意味ニ用ヰタルモノナ
アルニ係ル其概スル處ハ一國ノ組織ト國民ノ權利義務トヲ定ムル
モノト云フニ在リ一國ノ組織トハ即チ立法權行政權司法權ノ配置及
ヒ其ノ相互ノ關係ヲ云ヒ國民ノ權利義務トハ其身體ノ自由財產ノ所
有權言論結社出版等ノ自由及ヒ兵役納稅ノ義務等ヲ云フ此ノ如ク一
國ノ組織ヲ定ムルモノハ主權者ノ大權ヲ示シ併セテ其濫用ヲ防ギ又

農 務 大 臣 伯 爵 井 上 馨
司 法 大 臣 伯 爵 山 田 顯 義
大 藏 大 臣 兼 內 務 大 臣 伯 爵 松 方 正 義
陸 軍 大 臣 伯 爵 大 山 巖
文 部 大 臣 子 爵 森 有 禮
遞 信 大 臣 子 爵 榎 本 武 揚

國民ノ權利義務ヲ定ムルモノハ人民ノ安固ヲ謀リ併セテ其國ニ對スル義務ヲ示スニ在リ是ヲ以テ憲法ノ意味之ヲ平易ニ解釋シ來レハ官民ノ分限ヲ規定スト云フニ皈スルナリ抑モ國ノ國タル名稱アル所以ノモノハ人類ノ群居スルモノヲ指スニアラスシテ國ニ國憲ノ行ハル、モノヲ指スナリ苟クモ國ニシテ國憲ノ行ハル、ヲナケレハ國其ノ國ヲ爲サス故ニ文明國ト野蠻種族トノ區別ヲ生スルモノハ國憲ノ有無ヲ依ルモノトス然レモ國憲ナルモノハ必シモ成文ニ明記シタルモノナリト誤解スヘカラス縱令成文ノ確定ナシト雖モ直チニ之ヲ目シテ彼ノ國ハ憲法ナシト云フヘカラス現ニ英國ノ如キハ成文ノ憲法ナシト雖モ人皆此國ヲ以テ憲法ノ泉源ト稱スルニアラスヤ然レモ國憲ニシテ成文ノ確定ナキニ於テハ官民共ニ其分限區域ヲ明知スルニ難ク爲メニ不時ノ爭議ヲ生シ遂ニ一國ノ患害ヲ來スノ恐レナシトセス

是即チ近代ニ在リテ各國人民ノ成文憲法ヲ設クルヲ熱望スル所以ナリ成文ノ憲法ヲ設ケテ官民ノ分限ヲ規定シタルハ實ニ米國ヲ以テ嚆矢トシ次テ佛國ノ憲法成リ今日ニ至テハ歐洲諸國中英國ヲ除クノ外ハ悉ク其例ニ倣ハサルハナシ而シテ我邦建國以來亦已ニ國憲ノ存スルアリ唯之ヲ成文ト爲サミリシノミ然ルニ
明治天皇ノ至仁ナル廣ク海外ノ事跡ヲ鑒ミサセ給ヒ深ク内國ノ大勢ヲ察シ給ヒ明治維新ノ誓詔ヲ始メトシ八年四月十四日ノ大詔トナリ遂ニ十四年十月十二日ノ詔勅トナリ而シテ本年二月十一日ノ盛典トナリ正ニ成文ノ憲法ヲ欽定セラレ之ヲ國民ニ授ケ給ヘルモノハ蓋將來ニ向テ不時ノ爭議ヲ絶チ國家ノ安泰ヲシテ一層鞏固ナラシメントノ聖旨ニ出テタルヲ其勅詔ヲ拜讀シテ明カナリ今ヤ余輩日本帝國成文憲法ヲ拜讀スルノ榮ヲ得テ微力ヲ顧ミス之レカ解議ヲ下スニ當リ特

筆大書シテ讀者ト共ニ敬祝セサルヘカヲサルモノアリ請フ謹テ之ヲ述ヘン

泰西ノ史ヲ繙キ歐米各國ニ憲法ノ發生シタル故實ヲ考查スルニ多クハ主治者ノ權力ヲ濫用シ人民ヲ壓制スルノ極途ニ人民相結合シテ王者ヲ脅迫シ或ハ手段ヲ腕力ニ借り妖雲殺氣天地ニ充滿スルノ時ニ於テ僅カニ血ヲ以テ購ヒ得タルモノニシテ數百年外ノ今日ニ至リ尙ホ國憲ノ腥キヲ覺フルナリ見ヨ祥雲深ク宮城ヲ籠メ和氣均ク四海ニ溢ル、ノ時ニ於テ憲法ヲ欽定セラレ官民共和シテ授受ノ盛典ヲ完カラシメタルモノハ万国ノ歴史上大日本帝國ノ一アルノミ是レ著者カ讀者ト共ニ敬祝セサルヲ得サルノ一大美事ナラヌヤ

第一章 天皇

大日本帝國憲法ハ天皇陛下親ラ之ヲ制可シ給ヘル處ノ欽定憲法ニシテ國民相議シテ設ケタル民約憲法ニアラサルヲハ言ヲ俟タズ而シテ憲法ノ首條ニ於テ天皇ノ大權ヲ明定セラレタルモノハ本邦固有ノ國体上正ニ然ラサルヲ得サルモノニシテ編纂ノ序次固ヨリ當テ得タルモノト云フベシ謹テ按スルニ日本建國以來天皇ノ四海ニ君臨シ給ヘルモノハ敢テ一人ノ爲メニシ給ヘルニアラスシテ斯民ヲ治メ斯國ヲ保チ給フノ聖意ニ出ルコトハ舊紀ノ明カニ示ス處況ヤ今上維新以還ノ政事ニ徴シ爾來數回ノ勅詔ニ照スルハ其聖旨ノ倍々溢レテ掩フヘカラサルヲ見ルニ足ル聖旨ノ存スル處已ニ斯ノ如シ是ヲ以テ本章ニ於テ天皇ノ大

第一條

日本ノ國体及ヒ
統治權ノ所在

權ヲ明示セララル、ト同時ニ又親ヲ之ヲ制限サセ給ヘル点
アルヲ見ルナリ彼ノ立法ノ大權ヲ行ハセ給フニ當テハ必
ス議會ノ協賛ヲ要セラル、等ハ其一例ナリ蓋天皇ノ大權
ハ人誰カ之ヲ批議スルモノアランヤ然レモ其親ヲ制限サ
セ給ヘルモノハ實ニ陛下至仁ノ一大恩賜ナリ則チ吾人臣
民タルモノハ謹テ之レガ萬一ニ報スルノ心ナカル可ラズ
第一條 大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

本條ハ至重ノ法條ニシテ我カ大日本帝國ノ國体ヲ明
カニ併セテ統治權ノ所在ヲ示ス即チ我カ帝國ハ古
往今來ハ勿論國家無窮ノ間一系ノ天皇陛下之ヲ統轄
治御シ給フ旨ヲ示サレタリ今本條ヲ詳解スルニハ先
ツ國体ノ何物タルコトヲ述ヘ然ル后チ統治權ノ何物

帝國

ルコトヲ説カサルヘカラス抑國体ノコトニ關シテハ各國
古今ノ史乘ヲ通覽シ又其狀勢ヲ洞察スルニ左ノ數種
ニ外ナラス

第一 帝國

帝國トハ社會最上ノ權ヲ掌握シ一アツテニナキ
至尊ノ位ヲ踞ム所ノ人ニ因テ統轄セラル、ノ國
家ヲ云フ

第二 王國

王國トハ假令ハ英國ノ如ク英、愛、蘇、合衆シテ英蘭
土女王三國ノ王位ヲ兼ヌルカ如シ即チ皇帝ノ如
ク其國土ノ上ニ在ツテ無上並ヒナキノ位置ヲ有
スルモノニ比スレバ少シク其下位ニ在ルモノト

王國

云ツテ可ナリ

第三 民主國

民主國トハ上ニ帝王ナク所謂天下ハ天下ノ天下ニシテ一人ノ天下ニ在ラスト云フカ如ク其國ハ一國人民共同ノ所有ニシテ治御ノ權モ共同ニ存スト稱スルモノ之ヲ稱シテ民主國ト云フ

第四 酋長部落

酋長部落ハ以上三者ノ如ク其國家未タ完全ノ体ヲ爲サズ且ツ未タ人文ノ開明ニ趣カサル邦土ニ於テ一部若クハ一地方ニ於テ名望若クハ權勢アル人ニ其部落若クハ地方ニ於テ約束ヲ立テ命令ヲ制シ一小社會ヲ爲スモノヲ云フ然レモ之

レテ嚴格ニ云ハ、未タ之レ等ヲ以テ國ト稱ズルヲ得ス亦國体ト爲ス可カラスト雖此レ亦一小團結社會ノ体ヲ爲スモノナルカ故ニ之レヲ第四ニ掲クルモノナリ

以上述ルカ如キ國体ノ種類アルモ彼ノ佛國ノ如キハ或ハ王國ト爲リ或ハ帝國トナリ或ハ民主國トナリ僅少ノ年代ニ於テ彼此ノ變換甚ダ多シ吾カ日本人ノ眼ヨリ之ヲ視ルハ實ニ佛國ノ如キハ國体定リナキモント云フ可キナリ之レニ反シ本邦ノ如キハ上ニ掲ケタル第一ノモノニ屬シ太古開闢ノ始メヨリ未タ曾テ國体ノ變化アルコトヲ以テ國基ノ鞏固ナルヲ誇稱スルニ足ル可シ

又本條ニ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ストアリ即チ
大權ノ所在ヲ示サレタリ蓋此ノ數文字ハ特筆シ
テ之レヲ解カサル可カラス我カ國大古神代ハ得
テ之ヲ確知シ難キモ神武帝之ヲ承ケ帝都ヲ中原
ニ定メ天下ヲ統一シ給ヒシヨリ以還二千五百四
十九年ヲ閱シ帝系一百二十一代ヲ經タリ此ノ間
英雄東西ニ起リ時ニ亂世ナキニ非サレ用皆是レ
一局部面ノ私闘ニシテ未タ曾テ神器ヲ覬覦シ以
テ錦旗ニ抗セシ者ナシ偶々天慶ノ亂ノ如キ或ハ
之ニ類スルコアルモ天誅立ロニ至リ非望ヲ遂ク
ルヲ得サルノミナラス後世之ヲ嘲テ以テ笑扱ト
爲スニ至ル夫レ斯ノ如ク皇統連綿トシテ斷絶ス

ルコナキハ字内各國ニ比類ナキコニシテ我カ帝
國獨有ノ美事ナリトス然レ用世態ノ變遷ハ豫メ
人智ヲ以テトシ難ク千萬世ノ后或ハ至尊ヲ汚ス
ノ亂臣ナキヤチ保ス可カラス又人民自主ヲ唱道
スルノ極誤テ帝位ノ如何ニ論及スルモノナキモ
亦保ス可カラス之ヲ史乘ニ徵スルニ歐州中或ハ
大權ノ所在鞏固ナラサルカ爲メ國家ヲ危殆ニ陷
ラシメタルノ例乏シカラス是ヲ以テ憲法ノ首條
ニ之ヲ明記シ世人チシテ固有ノ國体ヲ知了セシ
メ以テ萬世一系寶詐無窮ノ大典ヲ示シ給フ所以
ナリ

次キニ統治權及ヒ其所在ノ事ニ及ハントス

今之ヲ説明スルニ當ツテハ統治權ノ何物タルヲ統治
權ハ何人ニ屬スルヤヲ論究セサル可カラズ

統治權ハ如何

第一 統治權

統治權トハ所謂英語ノ (SOVEREIGNTY) ソヴァレインティ 佛語ノ「スー
ヴレーンテ」ニシテ多クハ之ヲ主權ト譯ス凡ソ
國ノ國タル價直チ有スル所以ノモノハ外各國ニ
對立スルノ餘面ヲ全フシ内民土ノ安寧ヲ保ツニ
在リ若シ夫レ外國ト對等ノ地位ヲ保ツ能ハス内
國ノ政治法律悉ク彼レノ干涉ヲ受クルニ至ラハ
國其國ヲ爲スト謂フ可ラズ故ヲ以テ國ノ國タル
價直アラシメシト欲セハ外ニ向ツテ獨立對等ノ
威權ヲ全フシ内ニ向テ法律ヲ制定シ政治ヲ執行

スルノ全權チカラサルベカラス此ノ全權チ稱シ
テ主權即チ統治權ト云フ
惟フニ一國ヲ統治スルノ主權ハ其權力宜シク絶
大無限ノモノナラサル可カラズ故ニ立法權ノ泉
源此ニ出テ行政ノ權モ亦之レヨリ流レ司法權亦
之ヨリ發ス其他凡百ノ事行ハントシテ行ハレサ
ルヲナク爲サントシテ爲シ得サルコトナシ主權ノ
權勢絶大無限ナルコト實ニ斯ノ如シ然レモ主權
者カ其無限ナル主權ヲ利用シテ國民チ保愛スル
ニ止メ之ヲ濫用シテ國民ヲ傷害セサルハ立憲制
度ノ妙所ニシテ人皆立憲制度ノ下ニ安息センコ
ヲ希望スル所以ナリ

統治權ハ何人ニ
屬スル乎

以上ノ零序ニ因ツテ主權ノ何物タルト其効用ノ如何ハ了解スルニ足ラン

第二 主權即チ統治權ハ何人ニ屬スル乎

此ノ問題ニ至ツテハ古今其說同シカラス蓋シ其國体人情等ニ依リ立說ノ異同アルカ如シ今其一ニヲ掲ケテ義解ノ便ニ供セン

(一) 主權ハ一人ノ手ニ存スルト爲スモノアリ其說ニ曰ク國ニ明主ナケレハ其國必ス亂ル故ニ天ノ民ヲ生スルヤ必ス夫ノ聰明ナル人ヲ生シ四海ニ君臨セシメ以テ一國ヲ統治スルノ權ヲ行ハシメサルハナシ故ニ其君主タルモノハ天ノ明命ヲ承ケ社會名譽ノ泉源ト爲リ百機自ラ之ヲ裁ス是ヲ

主權一人ニ在ル
說

主權公衆ニ在ル
說

以テ一國ヲ保有スルノ主權ハ常ニ承命ノ君主ニ
販シ他ノ能ク關スル所ニ非ラサルナリト
(二) 主權ハ公衆ノ手ニ存ストスルモノアリ其說ニ
曰ク天ノ民ヲ生育スルヤ平等均一決シテ上下ノ
別アルナシ抑人類ノ共存シテ社會ヲ爲スニ當リ
テハ各自ニ自由ノ權利ヲ有シ所謂天下ハ天
下ノ天下ニシテ豈ニ能ク一人ノ專有シ得ルモノ
ナランヤ是ヲ以テ主權ハ全ク万民ノ中ニ存在シ
テ一人ニ己ノ占領スヘキモノニアラスト
(三) 主權ハ一人若クハ數人ノ手ニ存ストスルモノ
アリ其說ニ曰ク一國ノ獨立ハ他邦ト對等ノ位置
ヲ占メ苟モ他ノ制御ヲ受ケサルニ在リ古來此ノ

主權ハ一人若ク
ハ數人ニ在ル說

任ニ當ルモノ一人若クハ數人ノアルアリテ能ク
 一國ヲ保有シ得ルモノトス是ヲ以テ主權ハ政体
 ノ如何ニ依リ一人若クハ數人ノ手ニ存スル者ニ
 シテ未タ以テ一人又ハ公衆ト定限スルヲ得サル
 ナリト
 以上ハ重ナル學說ヲ摘載シタルニ過キス今願
 テ我カ國憲ヲ按ズルニ主權ノ歸スル所ハ則チ明
 ニ天皇ニ第一說ニ適合セリ然レモ彼ノ清國ノ
 如キ國ノ帝王タルモノハ何レノ人ヲ問ハネ聰明
 ニシテ國ノ首長タルニ足ル可キモノニ之ヲ與フ
 ルト同シカラズ抑々我カ 皇帝陛下ノ之ヲ掌
 握シ給フハ彼學說ノ能ク論理上ヨリ聰明ノ人ニ

與フルカ如キ比ニアラス惟ミルニ我カ大日本太
 古開闢ノ初メ國ヲ建テシ以來我皇室ノ主即チ皇
 帝相承テ相傳ヘ系統連綿トシテ實ニ萬世ノ久キ
 未タ曾テ他ニ移ラサルコトハ國史ノ照然トシテ吾
 人ニ示ス所ニシテ怪ムニ足ラズ然ラハ天皇ハ第
 三條ニ所謂神聖侵ス可カラサル國ノ首長ニシテ
 主權ノ泉源タルコト明ニシテ國起ツテ後天皇ニ賦
 與シタルモノニアラサルナリ是ヲ以テ之ヲ觀レ
 ハ憲法ハ事實ヲ明言シタルニ過キサルコトモ亦明
 ナリ故ニ憲法ヲ欽定シ始メテ主權ノ所在ヲ示シ
 タルモノナリトノ妄想ヲ抱ク可カラサルナリ
 以上ノ所說ニ依リ以テ本條ヲ了知スルニ足ル可

第二條

皇位ハ皇室典範ノ定ムル處ニ依リ皇男子孫之

ヲ繼承ス

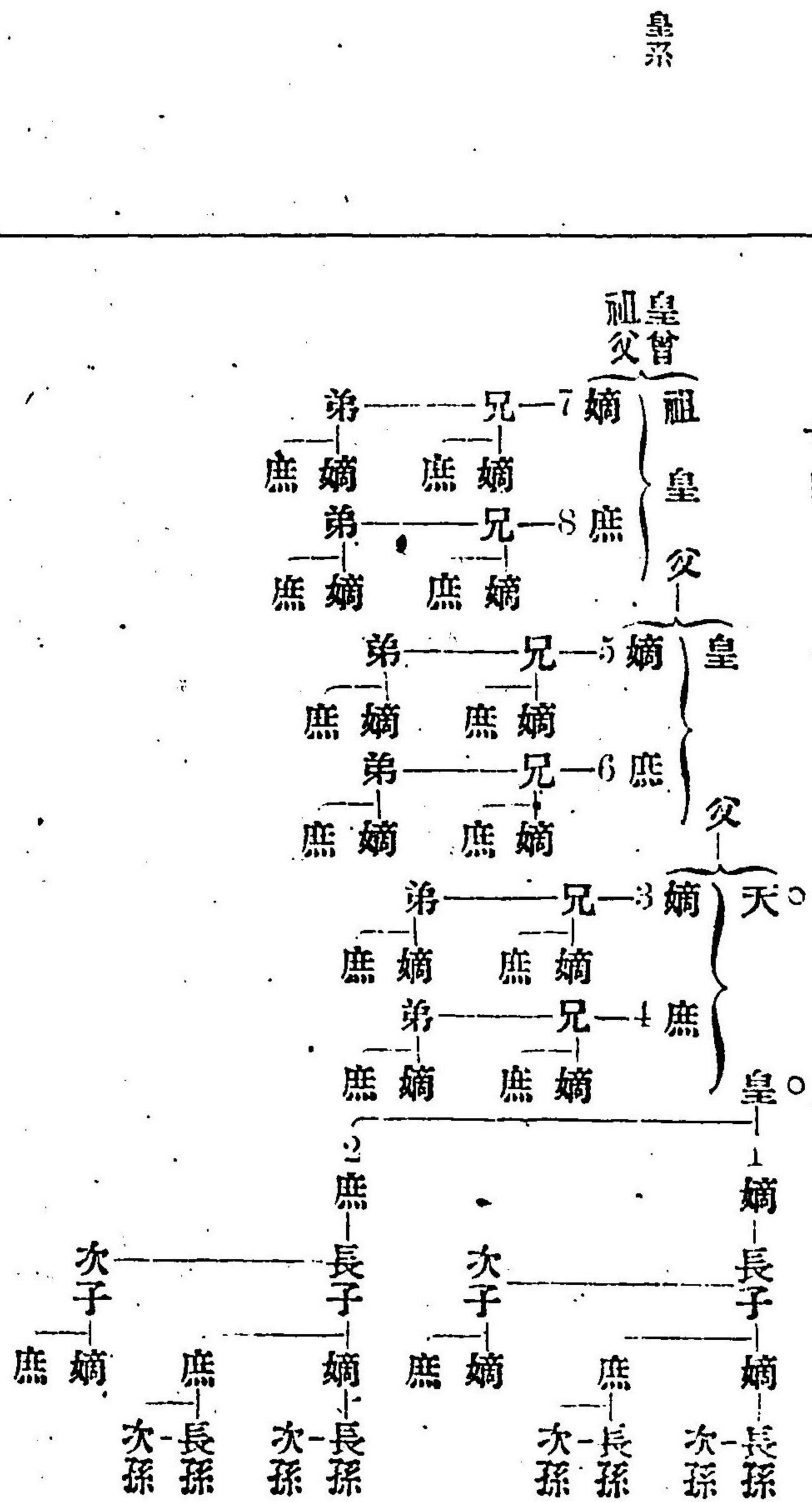
已ニ前條ニ於テ万世一系實祚無疆ノ大典ヲ制定セラレタル以上ハ皇位ノ繼承ヲ明定シ皇統ノ一系ヲ万世ニ垂レ天皇ノ至尊ヲ千載ニ示サセ給ハサルベカラサルコトハ蓋シ自然ノ順序ナルノミナラズ其皇位繼承ノ明定ナキニ於テハ或ヒハ皇室ノ安泰ヲ害シ從テ國家ノ安寧ヲ妨クルノ患ナシトセズ是則本條ノ制定アル所以ナリ恭ク歷朝ノ史乘ニ溯リ皇位繼承ノ如何ヲ精査スレハ男統ノ之ヲ承襲シ給フコト建國以來ノ典例ニシテ女統ノ之ヲ繼承シ給フコトハ實ニ實ニ其例外タル

皇位ヲ繼承シ得可キ人ハ如何

ガ如シ今試ミニ之ヲ算フレバ建國以來皇位ノ繼承一百二十一代ニシテ女統ノ繼承僅カニ十帝アルヲ見ル

日推古天皇額田部皇女曰皇極天皇寶女王曰齊明天皇皇極天皇再祚曰持統天皇鸕野原之皇女曰元明天皇阿閉皇女曰元正天皇永高内親王曰光嚴天皇阿倍内親王曰稱徳天皇光嚴天皇再祚而メ其女統ノ登曰明正天皇興子内親王曰後櫻町天皇智子内親王祚シ給ヘルハ一時已ムヲ得サルノ事情アルニアラサルハナシ皇位繼承ノ男統ニ存スルコトハ古來ノ恒典ニシテ本條ハ此恒典ヲ確定セラレタルニ過キス歐洲諸國ニ於テモ彼ノ「サリツク」法ノ行ハル、國ニ在テハ概チ皇男子孫皇位ヲ承繼シ之ヲ皇女子孫ニ承繼セシムルコトナシ本條ニ所謂皇男子孫トハ祖宗ノ皇統ニ於ケル男系ノ男子ヲ謂フモノニシテ皇室典範ノ定ムル處ニ據レハ正ニ左ノ順統ニ依ルモノ、如シ

○羅馬數字ハ系統ノ順序ヲ示スカ爲メ記入スルモノナリ



第三條

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

斯ノ如ク本條ハ單ニ皇位ノ繼承ハ皇男子孫ニ限ルヲ國憲ニ明示スルニ過キスシテ其順次ノ如キニ至リテハ右ニ叙スルガ如ク獨リ皇典ノ定ムル處ニシテ人民ノ敢テ口喙ヲ容ル、チ許サミルナリ余輩泰西各國ニ於ケル皇位繼承ノコトヲ查スルニ魯國ヲ除クノ外概テ憲法ヲ以テ之ヲ制定セリ英國ノ如キ明文ノ憲法ナキ國ニ於テモ特ニ定系條例ナル成文法ヲ以テ之ヲ明定セリ然レモ多クハ國會ノ同意ヲ得テ初メテ皇位繼承ヲ定ムルモノナレハ日本憲法ノ制定スル處トハ全ク反對ノ制度ナリトス讀者請フ混スル勿レ

太祖神武帝以來皇統聯綿一國無上ノ位置ヲ占メ給ヒ

万民ヲ統治シ國土ヲ保有スルノ全權ヲ握ラセ給フハ
大日本帝國固有ノ國體ニシテ誰レカ之ヲ知ラサルモ
ノアラシキヤ是ヲ以テ天皇ハ至貴至尊侵スベカラズ又
侮ルベカラザルナリ其至貴至尊タル固ヨリ人爲ヲ以
テ制定シタルニアラズ故ニ其神聖タルヤ亦疑フ容ル
ベカラズ已ニ天皇ニシテ神聖侵スベカラズトスレバ
假令政道宜キヲ得サルコアルモ吾人ハ天皇ヲ責ムル
ノ權利ナク又敢テ議スルノ權カヲ有セサルナリ獨リ
輿論ハ時ノ大臣ヲ責メンノミ夫レ一國ノ政權ハ其泉
源ヲ天皇ニ發スルヤ疑ナシト雖モ政府ニ之ヲ輔佐ス
ルノ大臣アリ補佐ノ大臣ハ各其國務ノ責メニ任スヘ
キモノナルコトハ實ニ憲法ノ大義ニシテ蓋シ争フヘカ

ラサルノ理論ナリ然レモ王者ハ德義上ニ於テ法律ヲ
敬重スベキノ義務アリ格言ニ曰ク王者ハ固ヨリ法律
ヲ敬重セサルヘカラズ然レモ法律ハ敢テ王者ヲ責問
スルノ權カナシト故ニ法律ノ權カハ王者ヲ除キ他一
般ノ人民ニ及フモノナレバ法律ハ其背法ノ處爲ヲ支
配スルノ權カナキナリ彼ノ歐洲諸國ノ憲法中白耳義
ノ憲法普魯西ノ憲法ノ如キ國君ノ身体ハ侵スヘカラ
ストノ明文アルヲ見ル蓋シ法律ノ制裁ハ國王ノ身体
ニ及ハサルヲ示スモノニシテ固ヨリ當然ナレモ獨リ
國王ノ身体ノミナラズ凡百ノコト其尊嚴ヲ汚スヘカラ
サルハ徒ニ言ヲ俟タズ本邦ノ憲法ハ是等不祥ノ語ヲ
避ケテ又大ニ意味スル處アリ其所謂神聖ニシテ侵ス

ヘカラストノ語中ニハ法律ノ制裁其聖体ニ及ハサル
ハ勿論又吾人ハ聖主ニ向テ批斥論議スルノ權ナキヲ
明示セラレタルモノナラント解釋セサルヘカラス

第四條

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲
法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

統治權ハ天皇ニ
在リ

本條ハ第一條ニ於テ統治權ノ所在ヲ示サレタリト雖
ドモ其効用ヲ明示セラレサルニ依リ本條ニ之ヲ規定
セラレタルモノナリ故ニ第一條ハ本條ヲ待テ完成セ
ラレタルモノト云フ可キナリ抑モ統治權ハ已ニ第一
條ニ於テ説明セシ如ク其力絶大無極ニシテ他ノ敢テ
制限干涉ヲ受クヘカラス故ニ之ヲ掌握スルモノハ國
家ノ元首即チ首長ニシテ我カ天皇ハ國ノ主ニシテ即

チ統治權ヲ掌握シ給フカ故ニ國憲ニ天皇ハ國ノ元首
ニシテト述ヘテラレタルナリ而シテ之ヲ總攬スト記シ
タルハ已ニ第一條ニ大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之
ヲ統治スト記セラレ天皇之ヲ統ヘ給フハ明カナレ
尙ホ統治權ヲ全ク他ニ委チサセラレズ陛下親ヲ之ヲ
總括收攬セラル、コヲ明示シ一層明確チ加ヘラレタ
ルモノト云フ可シ然レモ已ニ憲法ヲ發シテ統治權ノ
配置ヲ明定シ其無極ノ主權ヲ制限シ給ヘルノ点ハ猥
リニ之ヲ左右セラレサルハ亦疑ヲ容ル可カラス是レ
本條末項ニ於テ憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行フト明示セ
ラレタル所以ナリ之ヲ要スルニ統治權ヲ總攬スルノ
一句ハ正ニ主權ノ實体ヲ示シ其所謂憲法ノ條規ニ依

リ之ヲ行フノ一句ハ正ニ其効用ヲ顯スニ在リ今讀者ノ之ヲ解スルニ便ナラシムルカ爲メ統治權ハ天皇ノ掌握シ給フ其統治權ノ配置ノ如何等ヲ一表ト爲シテ示スコト左ノ如シ但本表ニ示ス處ノ統治ノ權ハ憲法ニ明記スル主タルモノヲ掲クルヲ以テ統治ノ權ハ此ニ示スモノ、ミニ限ルト速了スヘカラス常ニ統治權ハ憲法ニ於テ制限セラレタルモノ、外ハ最大無限ノ權力ナルコトヲ忘ル可カラス

天皇

配 置
立 法 權 (帝國議會奉行)
行 法 權 (行政權 (國務大臣奉行) 司法權 (裁判官奉行))
國

統治權ノ剖解

之ヲ 統治權
總 攬

憲 法 定 ム 天 皇 特 權
兵 馬 ノ 權
國 交 條 約 ノ 權
榮 典 授 與 ノ 權
刑 事 赦 免 ノ 權
其 他 憲 法 ニ 制 限
セ サ ル 全 權 ハ 天
皇 ノ 主 權 ニ 於 テ
一 ト シ テ 行 ヒ 得
ラ レ サ ル コ ト ナ シ
家

第五條
立法權ハ天皇ニ
アリ

第五條 天皇ハ帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フ

本條ハ天皇陛下ニ於テ統治權ノ一部分タル立法權ヲ行フ方法ヲ規定セラレ間接ニ其政体ノ如何ヲ示サレタルモノナリ因ツテ政体ノ種類幾何アルヤヲ觀察シ而シテ吾カ國憲ニ定メタル所ノ政体ハ其ノ何レニ屬スル乎ヲ說キ尙ホ立法權ハ天皇陛下ニ存スルノ正當

政体ノ種類

君主專治

共和政治

ナルコトヲ論セントス

今上ニ述タル旨趣ニ從ヒ政体ノ種類ノ重モナルモノ
ヲ揭ケ短簡ニ義解ヲ付ス可シ

第一 君主專治

君主專治ハ國ノ帝王タルモノハ所謂統治ノ大權
ヲ專有シ決シテ之ヲ配置スルコトナク立法行法皆
之ヲ躬ラシテ帝王ノ欲スル所ノ儘ニ之ヲ行フヲ
云フ

第二 共和政治

共和政治トハ國ニ帝王ノ如キモノナク社會各人
ハ上下アラサルヲ以テ各人共同ノ意ノ相合スル
所ヲ以テ法律ト爲シ之ヲ行フ政体ヲ云フ

寡人政治

會長政治

立憲君主政治

第三 寡人政治

寡人政治トハ國內ニ於テ智德兼備ノモノ數人ヲ
撰ヒ之レニ立法及ヒ行法ノ事ヲ行ハシムル政体
ヲ云フ

第四 會長政治

此會長ノ治理ヲ爲スハ未タ政体トシテ計フ可キ
モノニアラサレモ自ラ一治体ヲ爲スヲ以テ今姑
ク之ヲ政体ノ部中ニ揭ク其方法ナル野蠻ノ土民
中名望權勢アルモノ約束ヲ立テ、之ヲ守リ完然
ノ制裁等之レナク殆ント君主專治ニ似テ非ナル
治体ナリ

第五 立憲君主政治

此政体ハ第一第二ノ政体ヲ折衷シ立法ノ事能ク
 國ノ帝王一人ノ自由ト爲ラシメス亦民人一体ノ
 自由ニモ歸セシメサル中和ヲ取テ君主之ヲ行フ
 政体ナリ

政体ノ種類ノ重ナルモノハ以上列擧スル所ノモノナ
 リ今ヤ歩ヲ進メ吾カ國憲ノ在ル所ヲ察スルニ天皇ハ
 帝國議會ノ協賛ヲ以テ立法權ヲ行フト記セラレタル
 ヲ以テ觀レハ我カ國憲施行ノ日ヨリ以後ハ舊時ノ如
 ク法ヲ設クルニ當リ天皇陛下ノ獨裁ニ委スルヲ能ハ
 ス必ス帝國議會ノ協同賛成ヲ聞キタル上ニアラサレ
 ハ之ヲ制可スル能ハス帝國議會モ亦假令法律案ヲ可
 決スルモ之ヲ以テ直ニ法律ト爲スヲ能ハス必スヤ天

帝國ハ立憲君主
 制ナリ

立法權ハ統治權
 ニ原因ス

皇陛下ノ嘉納裁可ヲ得サレハ法律ト爲スヲ得サルナ
 リ之レ欽定ニ依テ與ヘラレタル國憲ノ明示スル所ナ
 レハ此ノ政体ハ已ニ掲ケタル政体ノ種別中第五ノモ
 ノニ屬スルモノニシテ即チ立憲君主政治ナルコト知
 ル可キナリ
 今又歩ヲ進メ立法權ハ天皇陛下ニ屬スルノ正當ナル
 コトヲ論セントス抑々立法ノ權ハ其源ヲ統治權ニ發
 スルモノニシテ統治權ハ天皇ノ總攬シ給フ處ナレハ
 其之ヲ行ハル、コト亦天皇ニ屬スヘキコト理ノ當ニ
 然ルヘキ處ナリ然レドモ立法ノ權ヲ以テ天皇之レヲ
 行フト明定シタルノ國ハ實ニ其稀有ナルヲ知ル今泰
 西各國ノ憲法ニ問ヒ立法ノ權何人ニ屬スルヤヲ吟味

スレハ主トシテ國會ノ權ニ屬シ或ハ國君及國會ノ共有ト爲シ法律ハ上下ノ約束ニシテ君民共同ノ事業ナリトスルノ輿論ニ傾向シタルモノ、如シ今一二ノ學說ヲ借リテ以テ其理由ヲ詳明スルニ代ヘントス或人嘗テ比耳義國憲法立法權ノコトヲ論シテ曰ク立法權ヲ構造スルニ國王兩院ノ三局ヲ以テシタリ此三局ハ各々其成立ノ元素性質ヲ異ニスルヲ以テ互ニ相調和シテ始テ國家ノ福祉ヲ暢達シ昌平ヲ維持スル爲メノ二大支障ヲ除去スルヲ得ヘシ二大支障トハ何ソヤ曰ク一ハ只管古風ヲ慕ヒ舊慣ヲ喜フヲ云ヒ一ハ歲月ヲ經テ持重スベキノ實利ヲ損傷スルヲ顧慮セス惟々新奇ヲ喜フ過激不練ノ欲望ヲ云フ是ヲ以テ國王ヲ

以テ輝シタル君治制ノ元素モ元老院ヲ以テ顯シタル保守ノ元素モ代民院ヲ以テ表シタル民心ノ元素モ之ヲ各別ニ分離スルハ立法上ニ其功用ヲ達フスルヲ得ス故ニ相互ニ其權勢ヲ和シ其欲望ヲ節シ過激ノ銳氣ト強暴ノ抗爭トヲ制シテ其中庸ニ歸着セシムルヲ要ス斯ノ如クシテ始メテ國民ノ實利ヲ保維シ永遠不朽ノ法律ヲ制定スルノ條件ヲ具備スト謂フヘシト

(參照比國憲法第二十六條立法權ハ國王代民院及ヒ元老院協同シテ之ヲ行フ)

又ブルーム氏英國ノ憲法ヲ論シテ曰ク立法權ト行法權トヲ擧ケテ一人若クハ數人ニ與ヘ之レカ權勢ヲ總合スルヲ得セシメバ其國必ス自由ナキニ至ラン蓋シ

斯ノ二權ニシテ之ヲ總合スルヲ得ハ之カ局ニ當ルモ
 ノハ必ス酷法ヲ設ケ之ヲ濫用シ其威カヲ肆マ、ニス
 ルヲ得ヘケレハナリ夫ノ立法ノ權ト行政ノ權トチ區
 別シテ之ヲ二所ニ分置スルモノハ則チ否ラズ願フニ
 此時ニ當テハ立法ノ權カヲ主掌スルモノ必ラス其心
 チ留メ其意ヲ致シ漫ニ大權ヲ舉ケテ之ヲ行政ヲ司掌
 スルモノニ與ヘス以テ自己ノ獨立ヲ維持シ以テ民人
 ノ自由ヲ保全スヘキナリ是ヲ以テ我英國ニ在テハ夫
 ノ最上ノ權カヲ分配シテ之ヲ二部トシ立法ノ權ハ舉
 ケテ之ヲ國會ニ歸シ行政ノ權ハ舉ケテ之ヲ君主ニ歸
 スト議者或ハ此論理ヲ移シ來リテ本邦ノ國憲ニ應用
 セシメント試ムルモノアリ蓋立法行政ノ大權ヲシテ

全ク一人ノ專行スル處ニ放任セハ或ハ弊害ノ因テ生
 スルノ恐レアルヲ著者モ同意ヲ表スル處ナリト雖
 其弊害ノ生スル恐レアルカ爲メニ立法ノ權ヲ國會
 ニ屬スルモノトノ理論ニ至テハ未タ以テ敬服スル
 チ得サルナリ前已ニ論スル如ク國ノ統治權ヲ專有ス
 ル者ハ又立法行政ノ權ヲ特有スヘキヲ理論ノ正格ナ
 ルモノニ著者ノ主論亦此ニ在リ然レモ國君ノ法律
 チ設定スルヤ萬一民心ニ背馳スルヲアテハ王者ノ甚
 タ快シトセサル處况ヤ又一人立法ノ權ヲ專行スルノ
 弊ハ世議ノ免レサル處ナレハ之ヲ制限シテ無限ナラ
 シメザルハ王者ノ德ニシテ策ノ最得タルモノト云ハ
 ザルヲ得ス本條ハ嚴然天皇ノ立法權ヲ行ヒ給フヲ

示シ之ヲ議會ノ協同賛成ヲ經ヘキコトニ制限セラレ
タリ故ヲ以テ議會若シ其法律原案ヲ否決スルトキハ
決シテ法律ノ効力ヲ有セス之ヲ要スルニ立法權ノ天
皇ニ屬スルコトハ理論上一歩モ假ス處ナシト雖其議
會ノ協賛ヲ求メラル、コトニ制限シ給ヘルモノナレハ
實際上頗ル寬優ニシテ前者ノ所説ト殆ト其目的ヲ同
スルニ近カラントス

第六條

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其公布及執行ヲ命ス

法律ヲ裁可シ其
公布執行ヲ命ス
ル體天皇ニアリ

法案ノ裁可權ヲ主權者ノ特權ナリトスルノ点ニ至テ
ハ各國其理論ニ小異同アルニ係ラス版着スル處皆一
ナルガ如シ獨リ主權者ヲシテ議會所決ノ法案ニ對シ
其裁可ヲ拒絕スルノ權アルヤ否ヤニ關シテ頗ル論議

ノ喋々タルヲ免レサル處ナリ或ハ曰ク不裁可ノ權ヲ
シテ主權者ニ放任スルハ行政ノ長官ヲシテ議政權ヲ
侵犯セシムルモノナリト又之ヲ駁スルモノ、言ニ曰
ク主權者ヲシテ議會所決ノ法案ヲ否可セシムルヲ得
ルモノハ偶々非法ヲ正サント欲スルノミナラス又行
政官ヲシテ立法官ノ專橫權ヲ防カシメ以テ憲法上ノ
勢力ヲ得セシメント欲スルニ在リ夫レ法ヲ裁可スル
ハ無上ノ威權ニシテ其力甚々廣大ナルモノナレハ若
シ其之ヲ擧ケテ全ク代議官ニ皈シ常ニ人民ノ后援ヲ
以テ之ヲ用井シメハ其權力ハ行政ノ局面ヲ抑壓シ大
ニ治國ノ途ヲ亂ルノ恐レアラシク是則チ老練博識ナル
政治家カ夙ニ一大條章ヲ設ケ其弊ヲ防カント欲スル

所以ニシテ夫ノ行政ノ官長ヲシテ法案ノ裁可ヲ拒絕
スルヲ得セシムルカ如キハ蓋シ其主要ナルモノナリ
云々

以上ノ理論ハ主權者ヲ以テ行政長官トナシ立法權ハ
國會ニ屬スルモノト爲スノ國ニ於テ專ラ行ハル、モ
ノニシテ而モ尙ホ法案ノ裁可權ヲシテ主權者ニ委ス
ルノ正且利ナルヲ論スルモノ比々皆是ナリ今ヤ之ヲ
本邦ノ憲法ニ照ストキハ昭々乎トシテ更ニ一点ノ疑
アルヲ見ス抑法案ノ裁可權ハ立法權ノ發動スルモノ
ニシテ立法ノ大權力ハ天皇ニ屬スルコトハ前條已ニ之
ヲ説明シタルガ如クニ其裁可權ノ天皇ニ專屬スベ
キコト固ヨリ首尾相貫クノ理論ナリ已ニ裁可權アリ何

ソ之ヲ裁可セサルノ權ナキヲ得ンヤ是ヲ以テ天皇ハ
法案ヲ裁可シ及ヒ之ヲ裁可セサルノ權アリテ又之ヲ
裁可シタル以上ハ之ヲ公布シ之ヲ執行スルノ命令ヲ
爲シ給フコト理ノ當然ナリ唯其議會ノ成議ヲシテ不裁
可アラシムコトハ特別ノ事情アルノ場合ニ生出スベク敢
テ濫リニ不裁可ノ權ヲ弄用シ公衆ノ望ニ背カセ給フ
ガ如キ恐レナキコトハ天皇ノ德義ト共ニ余輩ハ保証セ
ント欲スル處ナリ 英國ニ於テハ國王ニ於テ不裁可ヲ行ヒタルハ
女王アンノ時代ニ於テ一回之ヲ行ヒタル以來
百數十年之ヲ行ヒタルコト云フ 天皇ノ不裁可ノ權アルコト以上述ルカ如
シ而シテ其不裁可ノ方法結果ニ至テハ各國其制全シカ
ラズ因テ或ハ世論ノ此ニ及ハンコトヲ恐レ之ヲ摘録シ
併セテ本條ハ何レノ方法ニ從フモノナルヤヲ釋セン

トス

余輩之ヲ泰西ノ例ニ照スニ主權者ニ於テ不裁可ノ權ヲ行フニ三種ノ方法アリ即チ左ノ如シ

(イ) 大統領ニ於テ議會ノ議決法案ヲ制可セサルモ上下各院再議ノ上三分ノ二以上ノ全意ヲ得テ前議ヲ可決ズルトキハ其法案ハ法律ノ効力ヲ有シ直ニ之ヲ施行ス是即チ裁可權ニ制限アルノ方法ニシテ米州聯邦ノ制度ナリ

(ロ) 國王ニ於テ之ヲ裁可セサレバ暫ク其議ヲ停止シ直チニ之ヲ施行セス更ニ翌年及翌々年ノ議會ニ付シニ會共ニ前議ヲ可決スルトキハ國王ノ裁可ヲ待タズシテ之ヲ施行シ否ラサレハ其議ヲ廢ス是即チ

裁可權ニ停止アルモノニシテ那威王國ニ行ハル、憲法ナリトス

(ハ) 國王一タビ之ヲ制可セサレバ其議ハ直ニ廢棄シテ之ヲ行フヲナシ是即チ不裁可ニ一ノ制限ナキモノニシテ白耳義亭魯士等ノ憲法ナリ

今本邦ノ制ハ以上何レノ方法ニ從フヘキモノナルヤ憲法ニ明定ナシト雖用其第三ノ方法ニ從フヘキモノナルヲ明白ナリ故チ以テ天皇一タビ不裁可ノ權ヲ斷行セラル、トアラハ其議ハ當然廢滅ニ皈シタルモノト論定セサルヲ得ス蓋シ之ヲ再ビセサルモノハ天皇ノ威嚴ヲ保チ又以テ不裁可ノ容易ニ斷行スヘカヲサルヲ戒ムルノ良制ナリ

第七條
帝國議會ノ召集
議會ノ開會閉會
停止
衆議院ノ解散

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會停止及衆議院ノ解散ヲ命ス

歐洲ニ於テハ曾テ王命ヲ待タスシテ議會ヲ開キ政府亦之ヲ追認シタルノ例ナキニアラス英國ニ於テハ「チャーレス」第二世ノ王位ヲ回復シタル共集會議及千六百八十八年ニ於テ王位ヲ「ウヰリヤム」第三世及ヒ「メレ」ニ與ヘタル議會ノ如キ皆國王ノ命ナクシテ集會シタル實例ナリ又毎年某月某日ヲ以テ議院自ラ當然集會スルコトヲ憲法ニ掲ケ國王ノ之ヲ召集スルヲ例外トシテ許シタルノ邦國アリ比耳義ノ如キ之レナリ是等ノ古例新制ハ本邦憲法ノ固ヨリ倣ハサル處ニシテ其議會ヲ召集シ又其開會閉會等一ニ天皇ノ特權ニ皈シ

悉ク其勅命ニ依ラザルハナシ蓋シ議會ヲ召集シ及之ヲ解散スルハ事重大ニシテ何人ト雖用之ヲ左右スルノ權ナキモノトス是ヲ以テ議會ハ獨リ天皇ノ勅語ニ依テ始メテ動クベク政府ノタメニ進退セラルベキモノニアラス本條ノ召集トハ勅諭ヲ以テ全國代議士ヲ集合セシムルモノニシテ其詳細ハ議院法法律第二號之ヲ規定セリ開會及閉會ハ文字ノ示ス處固ヨリ之カ說明ヲ要セサルモ其所謂停會及解會ニ至テハ聊說明ノ勞ヲ取ラサルヲ得ズ抑議會ヲシテ解散セシムルノ特權ハ獨リ天皇ニ存スルコト前已ニ述ルガ如シ而シテ其解散ヲ命スルハ如何ナル效用アルヤノ点ニ至テハ少ク之ヲ論セサルヲ得ス凡ソ國會議員タルモノハ忠

直公正一ハ以テ國家ノ安全ヲ保維シ一ハ以テ民心ノ
 輿論ヲ満足セシム可キヲ務ムヘキハ固ヨリ其任ナ
 リト雖亦或ハ黨派分烈ノ極遂ニ黨論ニ煽動セラレ私
 慾ニ惑溺シ或ハ國家騷擾ノ際人心激昂シ爲メニ兇惡
 粗暴ヲ逞フシタル等其例蓋シ乏シカラズ惟フニ非常
 ノ形勢ニ於テ議會ノ權力剛盛ナルハ極メテ危殆ニシ
 テ甚タ忌ムヘキノ極ナリ此時ニ當リ議員ハ黨議ノ大
 勢ニ誘惑セラレ臆脱雷同徒ラニ敵黨ニ抗爭ヲ試ミル
 コヲノミナシ不知不識人民ノ權利ヲ妨害シ國家ノ大
 計ヲ誤ルニ至ル斯ル變狀ナル議會ノ形勢ヲ挽回スル
 ノ策獨リ解散ノ一方法ナルノミナリ解散ヲ命シテ更
 ニ議員ヲ改撰セシメ果ノ民心ノ輿望ハ何レニ在ルヤ

ヲ明ニスルハ議會ヲシテ其常態平治ニ復セシムルノ
 最良手段ナリトス比國憲法調査委員ノ報告ニ曰ク特
 トシテ議員ノ撰舉黨派ノ詭計ニ係リ毫モ良民ノ本意
 ニ出テサルコトアリ斯ノ如キ場合ニ遭遇シ議院ヲ解散
 セサルハ假令政務ノ整頓ヲ妨害セサルモ國君ハ輿
 論ニ背キ大利益ニ反シ政治ヲ左道ニ導クニ至ルヘ
 シト
 由是觀之天皇議會ノ解散ヲ命シ給フハ人民ノ公權ヲ
 蔑辱スルニアラズシテ反テ之ヲ伸張確認スルモノト
 謂ハサルヲ得ズ何トナレバ議員ノ改撰ニ依リ特ニ人
 民ノ輿望ヲ聽納シ賜フモノナレバナリ本條集議院ノ
 解散ヲ命ストアリテ其貴族院ニ及ハサルモノハ貴族

院ハ世襲議員等ヲ以テ組織シ性質上散シ得ベキモノ
ニアラスシテ停會ニ止マルモノナレハナリ
已ニ議會ノ解散ヲ命スルコトハ國家ノ大計上已ムテ得
ザルノ理ヲ示セリ果シテ然ラハ之ヲ停會スルノ權ヲ天
皇ノ特有セラルヘキコト亦已ムテ得サルニ出ツ停會ハ
行務ノ緩急等ニヨリ一時ノ便宜ヲ計リ日ヲ刻シテ議
會ヲ停止スルモシニシテ之ヲ議會ノ解散ニ比スレハ
其性質効用甚タ劇切ナラサルヲ覺フ但本邦議員法ノ
定ムル處ニ依レハ其停會ノ期ハ十五日ヲ過ク可カラ
サルモノトス

第八條
天皇特權中ノ例
外

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其災厄ヲ避ケ
ル爲メ緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ

法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス

此勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若シ
議會ニ於テ承諾セサルハ政府ハ將來ニ向テ其効力
ヲ失フコトヲ公布スヘシ

本條ハ天皇ノ特權中殊ニ其例外ヲ制定セルモノニシ
テ例外ハ之ヲ狹隘嚴正ニ解釋スヘク濫リニ之ヲ擴張
スルヲ得サルハ普通解釋法ノ示ス處トス夫レ帝國憲
法ノ認メテ以テ法律ト稱スルモノハ帝國議會ノ協賛
ヲ經且天皇ノ裁可ヲ經タルモノナルヲ正則トス然ル
ニ議會ハ常ニ開會スルモノニアラスシテ天皇ノ召集
ヲ待テ始メテ開會スルモノナレバ又閉會ノ時アルヲ
免レズ若シ其閉會ノトキニ在リテ時機緊急必要ニ迫

此ノ例外ヲ設ケ
タルノ理由

リ而モ議會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ其勢天皇ノ大
 權ヲ活用シテ此間ニ處スルノ方法ナカラサル可ラズ
 即チ本條ノ明定アル所以ニシテ天皇ハ勅令ヲ發シ以
 テ法律ニ代用スルヲ得ルノ權ヲ示セルナリ(以下本條ノ
 勅令ヲ稱シ
 テ例外法令ト云フ者假
 リニ此名稱ヲ付スルナリ)蓋シ本條ノ例外ヲ制定セラレタ
 ルハ天皇ノ大權ヲ弄用セラル、ニアラスシテ國家自
 衛ノ理ヲ明カニシ國民保護ノ實ヲ擧グルニ在リ然リ
 ト雖モ政府ハ此ノ特權ヲ濫用シテ議會ノ決議ヲ忌避
 スルノ器具ト爲シ容易ニ既決ノ法律ヲ破却スルアラ
 ハ國家ノ大害之ヨリ甚シキハナシ惟フニ德義アルノ
 政府斯ノ如キ弊害ヲ生スル恐レナガルヘシ去レハ正
 ニ左ノ條件ヲ以テ此權ヲ制限セラレタルナリ

第一 公共ノ安全ヲ保持シ又ハ災厄ヲ避クル爲

メナルコト

公共ノ安全ヲ保持スルトハ例ハ外敵國境ニ迫リ
 又ハ内亂將ニ内地ニ起ラントスルハ危急ニ處ス
 ルノ法令ヲ制セサルヘカラサルカ如キヲ云ヒ又
 災厄ヲ避ル爲メトハ傳染病毒流行シテ急ニ豫防
 法ヲ施サミルヘカラサルカ如キ必要アルチ云フ

第二 緊急必要ナルコト

本條勅令ノ目的假令人民ノ利益ヲ保護シ人民ノ
 幸福ヲ増進スルニ在リトスルモ普通ノ場合ニ在
 テ政府ハ決シテ此例外法令ヲ弄用スルヲ許サ、
 ルナリ然ラハ如何ナル場合ニ於テ之ヲ爲シ得ヘ

キヤ他ナシ勿々ノ際議員ヲ召集スルノ暇ナク且ツ事實ニシテ緊急避クヘカラサルノ必要アルヲ要ス而シテ其緊急必要ノ場合ヲ裁スルハ天皇ノ特權ニ存スルノミ

第三 帝國議會閉會中ナルヲ要ス

議會ノ開會中ハ必ス其協賛ヲ得ルヲ要ス本條ノ例外ハ獨リ閉會中ニ存スルノミ

以上ハ本條ノ要スル條件ナリ然リ而シテ此例外法令ハ一時已ムヲ得サルノ處分ナレハ之ヲシテ正則ニ復セシムルハ帝王ノ德義ニシテ又弄用ヲ防クノ好手段ナリ是即チ第二項ニ於テ此勅令ハ次ノ會期ニ提出シテ議會ノ公議ニ付セサルヘカラサルヲ示サレタル所

以ノモノナリ然ラバ進テ尙ホ本項ハ左ノ問題ヲ決定セサルヘカラズ

(イ) 議會ニ於テ例外法令ヲ承諾セサル片ハ如何

曰ク此ノ場合ニ於テハ其法令ハ將來ニ向テ効力ヲ失シ政府ハ其効力ヲ失ヒタルヲ公布セサルヘカラズ蓋之ヲ公布スルハ人民ヲシテ普ク其法令ヲ廢シタルヲ知ラシメ併セテ政府カ輿望ニ背カサルノ實ヲ示スモノナリ

(ロ) 其効力ハ何時ヨリ之ヲ失スル乎

曰ク議會之ヲ承諾セサル片ハ將來ニ向テ其効力ヲ失スルニ止リ既往ニ溯テ其無効ヲ及ボサ、ルナリ何トナレハ其臨機ニ例外法令ヲ廢スルヲハ

天皇ノ特權トシテ憲法之ヲ明許シアレハ毫モ違
法ノ處分ニ出テサルモノナレハナリ

(ハ) 議會之ヲ承諾シタルルハ如何

曰ク効力以前ニ溯リ更メテ公布ノ手續ヲ爲スニ
及ハサルベシ

(ニ) 政府ハ議會ノ否決シタルニ係ラス其効力ヲ失
シタルヲ公布セサルルハ如何

曰ク此場合ニ於テハ吾人ハ其法令ヲ遵守スルノ
義務ナク又之レカ制裁ヲ受クヘキ責任ナシ輿論
ハ時ノ主務大臣ヲ責メテ嚴正ナル勸告ヲ呈セン
ノミ

第九條

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲メニ又ハ公共ノ安寧

命令權ノ區域及
其目的

秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル
命令ヲ發シ又ハ發セシム但命令ヲ以テ法律ヲ變更ス
ルヲ得ス

本條ハ命令權ノ區域ヲ定メ併セテ其目的ヲ示スニ在
リ命令ノ權ハ行政權ノ發動スルモノニシテ固ヨリ天
皇ノ特權ニ屬ス人或ハ命令ト法律トヲ混同シ以テ大
ナル誤ヲ生スル恐レナキニアラス之ヲシテ確然分明
ナラシムルハ蓋シ必要ノヲナラン夫レ法律ハ議會ノ
協賛ヲ得テ天皇之ヲ裁可セラル、チ待テ始メテ生ス
ルモノナリ而シテ命令ハ全ク之レニ反シ議會ノ協賛
ヲ經ルヲ要セズ天皇或ハ親ラ之ヲ發シ給ヒ又或ハ内
閣ニ委任シテ之ヲ發セシム即チ之ヲ再言スレバ法律

ハ必ス議會ノ協賛ヲ要シ命令ハ獨リ政府ノ裁定ニ任
スルモノナリ是ヲ以テ勅令ト云ヒ閣令ト云ヒ省令ト
云ヒ又縣令ト云ヒ警察令ト云フ皆是レ行政權ノ發動
スルモノニシテ勅令ハ天皇親裁シテ親署セラル、ヲ
云ヒ其他閣令以下ハ皆其行政權ヲ委任セラレタル主
務者ノ權内ニ於テ發令スルモノトス今進テ其命令權
ノ目的ヲ討究スレハ本條明カニ之ヲ示セルカ如シ左
ニ之ヲ分説セン

第一 既定ノ法律ヲ執行スルカ爲メ必要ナル命
令ヲ發ス

法律ハ本ナリ命令ハ末ナリ然モ法律アリテ之ヲ
執行スルノ方法備ハラサルハ實ニ空文ニ屬セ

シノミ是ヲ以テ之ヲ執行スルニ當リ之レカ細則
ヲ設ケ之レカ手續ヲ規定スルハ行政權ノ已ムハ
カラサルモノナリ

第二 公共ノ安寧秩序ヲ保持スル爲メ必要ナル
命令ヲ發ス

苟モ公共ノ安寧秩序ヲ保持スル爲メ必要ナリト
認ムルハ主務官ハ法律ノ範圍内ニ於テ命令ヲ
發スルノ權アリ彼ノ地方官ノ縣令ヲ發シテ公衆
ノ安寧ヲ保護スルコト警察令ヲ布キテ患害ヲ未萌
ニ防ク等ハ皆命令權ノ作用ナラサルハナシ而シテ
其如何ナル場合ニ於テ之ヲ發スヘキモノナルヤ
ニ至テハ豫メ之ヲ論定スル能ハス獨リ主務官ノ

能ク機ニ臨ミ宜キヲ制スルアラシクヲ希フノミ
 第三 臣民ノ幸福ヲ増進スルカ爲メ必要ナル命
 令ヲ發ス

憲法ハ命令權ノ作用ヲシテ前二者ニ止メシムル
 ヲナク尙ホ一步ヲ進メテ人民ノ幸福ヲ増進スル
 ヲ目的トシテ之ヲ發セシム是レ即チ一國ノ經濟
 上教育上ノ事業ヲ擴張シ以テ人民生活ノ福祉ヲ
 祈リ人智發達ノ幸運ヲ希フハ亦一國ヲ統治スル
 ノ責任ニ行政權ノ範圍ニ屬スヘキモノトス
 命令權ノ性質目的ハ大畧斯ノ如シ而シテ命令權ハ
 如何ナル場合ト雖モ法律ヲ侵越スルノ効力ナク
 常ニ其範圍内ニ於テ之ヲ行ハサルヲ得ス若シ夫

レ誤テ法律ト抵觸スルノ命令アラハ吾人ハ之レ
 ニ服スルノ責メナキナリ故ニ曰ク命令ノ權ハ人
 民ノ自由ヲ妨害スヘカラス單ニ法律ノ範圍内ニ
 於テ勸告誘導シテ以テ人民ヲ保護シ事業ノ發達
 ヲ喚起スルノ性質ヲ帶ヒサルヘカラス
 學者或ハ命令權ノ區域ヲ以テ法律ヲ執行スル爲
 メノミニ限り或ハ之レニ警察命令ノ名稱ヲ付ス
 ルモノアリ現ニ佛蘭西白耳義ノ如キハ此ノ論決
 ニ依リ憲法ヲ制定セルモノ、如シ是甚メ其論決
 ノ狹隘ニ失スルニ驚カサルヲ得ス惟フニ帝國憲
 法ハ此論決ニ倣ハズ進ンテ命令權ノ及フ處ヲ擴
 張活用セラレタルモノナルベシ今ヤ本條ノ解説

チ了ルニ臨ミ之ヲ前條ト比較シテ其差違アル點ヲ示シ聊讀者ノ便ニ供セントス

(イ) 前條ノ所謂緊急ニシテ必要ナル場合ニ發スル例外法令ハ次回ノ議會ニ付スルマデノ間ハ全ク法律ノ効力ヲ有ス之レニ反シ本條ノ行政命令ハ法律ノ足ラサル處ヲ補充スルノカアリト雖而決テ法律ノ代用ヲ爲サス

(ロ) 例外法令ハ一ノ法律ナルヲ以テ議會ニ於テ之ヲ否決セサルノ間ハ法律カ吾人ニ與ヘタル自由ヲ束縛スルヲ得然モ行政命令ハ法律ノ與ヘタル自由ヲ束縛スルノカナシ

(ハ) 例外法令ハ時變ニ際シ制定發布スヘキ變則ナ

リト雖而行政命令ハ常時ニ規定發布スヘキ正則ナリトス

第十條

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免ス但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ特例ヲ掲ケタルモノハ各々其條項ニ依ル

本條ヲ解剖スル時ハ天皇左ノ專權ヲ有シ給ヒ又制限ニ依ラセ給フニ在リ

(イ) 天皇ハ行政各部ノ官制ヲ裁定ス

行政權ハ泉源ヲ天皇ノ主權ニ發ス而シテ天皇其專有シ給フ處ノ行政ヲ實行セラル、ニ當リテハ其下ニ立チ事務ヲ執行スルモノ即チ官吏ノ準據スヘキ官制ナカルヘカラス且ツ其官制ハ首長タル

行政各部ノ官制

天皇ノ隨意ニ之ヲ制定セラルヘキハ理ノ應サニ
然ラサルヲ得サル處ナリ何トナレハ其官制ニシ
テ他ノ干涉スル處トナラシカ天皇ノ統治權ヲ侵
シ奉ルノミナラス行政ノ延滞ヲ生シ尾大振ハサ
ルノ勢ヲ生セントス是ヲ以テ行政部分ノ官制ヲ
シテ天皇ノ裁定ニ任スヘキハ正理ノ許ス處實務
ノ速カナル處共ニ以テ完全ト云フヘシ

文武官ノ任免

(ロ) 文武官ノ任免ヲ司リ又其俸給ヲ定ム

文武官ヲ任免シ其俸給ヲ定メ給フコトハ天皇行政
ノ大權ヲシテ全然迅速ナラシムルニ欠クヘカラ
サルノ要訣ナリ故ニ内閣宰相ヲ始メトシ各大臣
其他行政ノ官吏ヲ任免シ給フコト固ヨリ其隨意ナ

ラサルハナシ現時ノ制度ニ依テ之ヲ觀レハ内閣
大臣ハ天皇親ク之ヲ任免セラレ其他ノ高等官ハ
大臣ノ奏聞ニ依リ之ヲ裁可シ給ヒ又其他ノ事務
官吏ニ至テハ各長官ノ委任權内ニ於テ之ヲ任免
セラル、カ如シ是ヲ以テ時ノ宰相ノ如キ他ノ固
ヨリ推舉干涉スヘキ限リニアラスト雖モ其德望
高クシテ世人ノ敬服スヘキ人物ヲ選定セラルヘ
キコトハ一ニ天皇陛下ノ明察ニ委テ奉ルノ外ナキ
ナリ又兵馬ノ大權ハ行法權ノ必要ナル一大元素
ニシテ次條之ヲ定ムルカ如ク天皇命令ノ下ニ直
接スルモノナレハ其將校士官ノ叙任免黜ハ固ヨ
リ其專掌シ給フ處ナリ之ヲ要スルニ行法權所屬

ノ官吏ハ其任免俸給ヲシテ一ニ天皇ノ專掌ニ皈
セシムルハ其信任ヲ厚カラシメ統治一途ニ出テ
政務ノ迅速ヲ期スル所以ニシテ又行政ノ秘訣ナ

ハ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ定メタルモノハ例外
トス

文武官ノ任免ハ天皇ノ特權ニ屬スルヲ前已ニ説
明セルガ如シ然レモ是レ唯行政局部ノ官職ニ對
スルモノニシテ法官ノ如キハ憲法第五十八條參
看明カニ之ヲ定メ其他直接若クハ間接ニ行政官
ノ事務ヲ監査スルノ官職ニ至テハ特ニ法律ヲ以
テ之ヲ定メ其信用ト獨立ヲ鞏固ナラシム彼ノ會

計検査官ノ如キハ特別ノ法律ニ定ムヘキ性質ニ
シテ是等ノ黜免ヲ天皇ノ專掌外ニ付シ親ラ特權
ヲ制限セラレタルハ一ニ陛下ノ至意ニ皈セサル
ベカラス

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

第十一條
陸海軍ノ統帥

謹テ舊記ヲ按スルニ嘗テ王室ニ敵シ國民ニ仇セシモ
ノヲ誅伐セラルハニ當リ天皇親征シ給ヘタルノ例故
實甚タ乏シカラス而シテ古來兵馬ノ權ハ擧ケテ天皇
ニ屬シタルコト亦舊記ノ吾人ニ示ス處ナリ然ラバ即
チ之ヲ日本帝國固有ノ國躰ト稱シテ可ナリ天皇ハ兵
馬ノ元帥タルヲ獨リ國躰ノ許ス處ナルノミナラス
理論上實ニ是認セサルヘカラサルノ事實ナリ夫レ國

王ハ一國ヲ統治スルノ大權ヲ有セラル、モノナレハ一國ノ秩序ヲ正シ國民ノ安寧ヲ保護セラルヘキハ固ヨリ至當ノコトニシテ一朝内亂外寇アルニ當リ之ヲ鎮定防禦スルハ正ニ是レ政令ヲ實行シテ國家ノ安康ヲ保ツ所以ニシテ兵馬ノ權ヲシテ擧ケテ天皇ニ屬セシメサルヘカラスナルノ理由ナリ泰西ノ學者往々兵馬ノ權ヲシテ王者ニ屬セシムルノ非ナルヲ切論スルモノアリ其論スル處大概兵馬ノ權ヲ弄用シテ一國ノ治安ヲ妨害スルト云フニ在リ然レモ是レ架空ノ理論ノミ未タ以テ本邦ニ移シ來ルノ價直ナキヲ知ル况ヤ天皇ノ兵馬ヲ統一サセ給フハ皇室ノ安泰ヲ千載ニ保ツノ名策ノミナラス他ニ漠大ナル必要ノ存スルモノアル

ヲ悟ラサルヘカラス必要トハ何ソヤ曰ク軍人ヲシテ一令ノ下ニ蹶起セシム曰ク軍令一途ニ出テ以テ施行ノ迅速ヲ保ス曰ク帷幄ノ謀計外ニ漏レズ蓋シ是等ハ本ト兵法ノ秘訣ニシテ之ニ反スレバ兵馬ノ兵馬タル所以ノモノヲ失ヒ國ヲ保チ民ヲ安ズル能ハザルナリ

第十二條

陸海軍ノ編制及ヒ常備兵額

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム

天皇ハ兵馬ノ大權ヲ統帥シ給フコトハ前條已ニ之ヲ明カニセリ此ノ大法定マル以上ハ軍隊ノ組織艦隊ノ編制其他配置ノ區畫陸塞海防等ニ至ル迄皆其權内ニ於テ制定セララルヘキモノトス殊ニ常備兵隊ノ員數ハ天皇ノ特權ニ於テ増減其意ノ如クナラサルハナシ是即チ兵馬統一ノ大權ヲシテ能ク其目的ヲ達セシムルニ

在リ歐洲ニ於テハ平時兵員召募ニ至テハ多クハ國會ノ議決ヲ要スルモノアリ(英米ノ如キ)是ヲ以テ議者或ハ兵員ノ増加ヲ議會ニ問ハスシテ多額ノ費用ヲ人民ニ負擔セシムルノ非ナルヲ疑フモノアリ然レモ是レ皮相ノ見解ニシテ未タ究メサルノ臆説ナリ議會ハ已ニ歳出豫算ヲ議スルノ權アリ故ニ之ヲ間接ニ制限スルノ効アルヤ明カナリ若シ之ヲシテ歐洲ノ例ニ倣ヒ常備兵員ノ増減ヲ一々議會ニ問フモノトセハ大權ヲ傷クルノミナラス時機ニ際シテハ或ハ國家ヲ危カラシムルニ至ルノ恐レアラントス况ヤ天皇ノ慈仁ナル無用ノ軍兵ヲ召募シテ無益ノ費用ヲ生セシメ良民ノ苦ヲ買ハル、ガ如キ恐レナキコトハ余輩ノ信シテ疑ハサ

第十三條

ル處ニシテ間接ノ方法即チ豫算ヲ議定シテ其無限チ箝制スルハ頗ル味アリト謂ツヘキナリ

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締

結ス

本條研究ヲ要スルモノ三個アリ一ニ曰ク宣戰ノ權二ニ曰ク講和ノ權三ニ曰ク條約締結ノ權之レナリ今追次之ヲ論セン

一 宣戰ノ權

凡獨立ノ國牀ヲ以テ外國ト對持スルモノハ時トシテ互ニ讓ル可ラザルノ位地ニ立チ遂ニ紛爭ヲ生スヘキコトハ古來史上ノ之ヲ示スノミナラス現時余輩ノ屢目撃スル處ナリ相互ノ紛爭言論ニ止

宣戰ノ權

リ平和ニ局ヲ結フハ吾人ノ幸福之レニ過キス
 ト雖正一朝事破レテ其局ヲ言論ニ結ハサルハ
 腕力ニ事ヲ決セサルヲ得ス此時ニ當リ交戦ヲ布
 告ス所謂宣戦ノ權之レナリ本條ハ明カニ之ヲ天
 皇ノ特權ニ付シ又議會ノ干涉ヲ容ル、ヲ許サス
 議者或ハ交戦ノ議會ニ付セサルヘカラサルヲチ
 論スルモノアリ其要ニ曰ク交戦ノ實ニ重大ナ
 リ宜ク民心ノ向フ處ヲ問ハサルヘカラス又曰ク
 戦ヲ好ムノ君王ハ常ニ此ノ權ヲ弄用スヘシト嗚
 呼何ソ思ハサルノ甚キ余輩今左ノ金言ヲ借リ議
 者ノ項門ニ針セントス
 佛國千七百九十年ノ國會ニ於テ議院ノ討論沸ク

カ如キノ中ニ於テ「ミラポ」氏辨シテ曰ク議會ニ
 於テ可否ノ意見ヲ吐露スルノ時日ヲ有セサル中
 早クモ敵視ノ勢ヲ爲スヲ屢ナリ敵視ノ勢ハ猶ホ
 真正ナル戰ニアラサルモ事實上ニ於テハ方ニ交
 戦ノ狀ヲ呈出セリ何レノ場合ニ於テモ議院ハ到
 底敵視ノ勢ヲ繼續スヘキヤ否即チ交戦ノ狀ヲ保
 續スヘキヤ否ヲ決定スルニ過キスト
 宜哉言ヤ若シ夫レ交戦ノ「ヲ」議會ニ問フモノト
 セハ其豫謀計畧ヲ悉ク報道セサルヲ得テ敵ヲシ
 テ我カ陰謀ヲ悟ラシメ其豫防ヲ固カラシムルモ
 議者ハ關スル處ナキカ又議者ノ所謂君王兵權ヲ
 弄用スルトノ「ハ」本邦ノ將來ニ向ヒ立憲政体ノ

下猶ホ之レアルヲ疑フヤ惟フニ天皇假令戰ヲ好
ミ給フトモ宰相ノ輔佐ナルアリ事情ノ詐サ、ル
アリ何ソ濫リニ兵馬ヲ弄シテ兒戲ニ類スルヲ
學ヒ給フノ恐レアラシヤ畢竟議者ノ後説ハ野民
ノ私言トシテ之ヲ斥ケテ可ナリ

二 講和ノ權

一時交戰シテ其局未タ結ハサルニ彼我互ニ讓ル
處アリ兵ヲ收メテ和ヲ講スルニ至ルハ又事情ノ
免レサル處ナリ之ヲ講和ノ權ト稱ヒ亦天皇ニ屬
ス蓋和ヲ講スルハ國家治平ニ復スルノ道理ニシ
テ彼我ノ間ニ於テ最モ希フヘキヲナリトス而ソ
其和ヲ講スルヤ實ニ時機失フヘカラサルモノア

講和ノ權

條約締結ノ權

三 條約締結ノ權

リ是ヲ以テ議會ノ協賛ヲ經ルヲ要セス
天皇ハ國家ヲ代表セラル、モノニシテ外國トノ
條約ヲ結フヲ亦其特權ニ存ス蓋條約締結ノヲハ
此ニ限定スル能ハサルモ彼ノ和親通商其他同盟
郵便ノ如キニ關シ彼我ノ間ニ於テスルヲ云フ是
亦機密ヲ要スルヲ多キニ居ルヲ以テ議會ノ協賛
ヲ待タサルナリ
叙シテ此ニ至リ之ヲ泰西ノ制度習慣ニ對比スル
ニ又大ニ參酌スヘキモノアリ
英國其他數國ノ實際ニ徵スル所ハ交戰ヲ爲スニ
當リテハ豫メ國會ニ通知シ其贊助ヲ求ムルヲ

法ノ義務ニアラスト雖在實際ノ慣例ナルカ如シ
蓋之ヲ國會ニ通知スルモ敢テ支障ナキノ場合ナ
リシカ故ナリ本邦ニ於テモ國會ノ協賛ヲ要セザ
ルヲ前已ニ述ヘタル如クナレ在之ヲ通知シテ
其意見ヲ問フモ他ニ支障ノ恐レナキ場合ニ於テ
ハ前者ノ慣例ニ從フモ亦穩當ナル處置ト云フヘ
キカ

李魯士其他二三ノ國ニ於テハ貿易其他國費ヲ要
スヘク又ハ各人ニ關係スヘキ條約ハ國會ノ協賛
ヲ要スルヲ憲法ニ規定セリ本邦ノ制之レト異
ナリト雖在又以テ參酌スヘキナリ

第十四條

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

本條ハ宜ク戒嚴ノ何物タルヤヲ概論スルヲ要ス戒嚴
トハ戰時危急ノ時機ニ際シ普通法令ノ執行ヲ停止シ
總テ軍事處分ニ委ヌルヲ云フモノニシテ之ヲ戒嚴令
ト云フ是ヲ以テ外寇國境ニ迫ルカ内亂某地ニ起ルニ
當リテハ戒嚴令ヲ施行ス而シテ其施行ノ地界ニ至テ
ハ司法及行政ノ一部ヲ擧ケテ軍事處分ニ管轄支配セ
シメサルヘカラス是亦天皇ノ特權ニ屬スヘキモノニ
シテ常ニ機急ノ際ニ發スルモノナレハ亦議會ノ協賛
ヲ經ルノ邊アラサルナリ而シテ其要件ト効力トハ別ニ
法律ヲ以テ之ヲ規定セラルヘキヲ明示セリ要件ト
ハ戒嚴ヲ宣告スヘキ時機區域ニ於ケル限度等ヲ云ヒ

効力トハ宣告ノ結果ニ依リ其効力ノ及フ限界等之レナリ是等ハ別法ノ定ムル處此ニ其詳細ヲ論セス(現時本邦ニ行ハレタル戒嚴令ナルモノアリ明治十五年八月五日ノ制定ニ係ル)

議者或ハ戒嚴令ヲ發スルノ權ヲシテ天皇ノ專權ニ屬セシムルヲ難スルモノアリ佛國ハ戒嚴令ヲ發スルノ權ヲシテ國會ノ權ニ皈シ普國ハ之ヲ內閣ノ權ニ委セリ而シテ其主意トスル處之ヲ弄用スルノ危險ニ皈ス余輩又其杞憂ヲシテ本邦ノ形狀ニ適用スルヲ笑ハサルヲ得ス之ヲシテ陛下ノ特權ヲラシメ以テ危急ニ處スルノ効用アラシムルニ於テ何カアラン彼ノ獨逸帝國憲法ノ如キ亦其權ヲシテ帝王ニ皈セシメタルヲ見ル

第十五條
爵位勳章榮典

第十五條 天皇ハ爵位勳章及其ノ他ノ榮典ヲ授與ス

天皇ハ國ノ元首ニシテ實ニ榮譽ノ泉源タリ是ヲ以テ賞叙ノ權柄一ニ其特權ニ皈セサルハナシ彼ノ國家ニ功勞アルモノ社會ニ鴻益ヲ與ヘタルモノ其他旌表スヘキ善行美舉アルモノニ對シ賜フニ爵位ヲ以テシ或ハ勳章其他榮譽ノ儀典ニ預カラシメ之ヲシテ貴族ニ列セシメ之レヲシテ名譽ヲ保タシメ又之ヲシテ恩典ニ浴セシメラル、モノ悉ク其源ヲ至尊ニ汲マサルハナシ余輩ハ本朝ノ歴史ヲ緝キ中古武門ノ威力ヲ擯マ、ニスルノ章ニ至リ未タ嘗テ浩嘆セサルコトナシ而シテ又窃カニ欣然タルノ情ヲ發セサルコトナシ何チカ浩嘆スル曰ク中古以來武門ノ權威ヲ弄用スル實ニ甚シ

ク賞罰ノ權柄當時全ク武門ノ手ニ皈シタルニアラス
ヤ何ヲカ欣然タル曰ク賞罰ノ權柄一時武門ニ皈セシ
ニ係ラス叙授ノ大典ハ依然朝廷ニ屬シタルノ跡アル
ニアラスヤ是レ余輩ノ一ハ以テ惜ミ一ハ以テ欣フ所
以ナリ維新以降此ノ特權ヲシテ朝廷ニ皈スルノ幸運
ニ至ラシメ遂ニ憲法ヲ以テ之ヲ明定スルニ至ル豈亦
愉快ナラスヤ

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

既定裁判ノ効力ハ何人ト雖モ之ヲ動カス能ハサルハ
普通ノ原理ナリ故ニ罪人ニ對シテ刑罰ノ宣告ヲ爲シ
之レカ確定ヲ爲スルハ之ヲ執行スルノ途アルノミニ
シテ之ヲ消除スルノ途絶ヘタルモノト云フテ可ナリ

而ノ其効力ヲ動カシ得ラルヘキモノハ獨リ天皇ノ特
權アルノミ惟フニ法律ヲ設ケ之ヲシテ遵奉セシメ其
之レニ背クモノヲ罰スルノ權ハ悉ク其源ヲ天皇ニ發
セサルハナシ是ヲ以テ之ヲシテ消除セシムルノ權モ
亦天皇ニ專屬スヘキモノニシテ他ノ敢テ企テ及フ處
ニアラサルナリ余輩ハ本條ノ順次ヲ追ヒ其如何ナル
モノナルヤヲ釋セントス

(イ) 大赦及特赦

二者ノ何物タルヤヲ辨セントセハ宜ク二者ノ差
違ヲ説明スルヲ以テ捷徑トス

第一 大赦ハ天皇陛下ノ特權ニ屬シ朝廷ノ大故
アルニ際シ或ハ祥慶ヲ表シ或ハ慈惠ヲ垂レ給フ

ノ聖意ニテ特命セラル、モノニ之ヲ憲法ニ明
 示シ他ノ法律ニハ唯其効果ヲ示スニ過キス(第六法
 十四條同第
 九十七條)特赦モ亦天皇陛下ノ特權ニ屬スト雖モ
 手續上多少ノ差異ナキ能ハス故ニ其詳細ナル手
 續ヲ治罪法ニ規定セリ(日本治罪法第四百
 七十七條以下參看)
 第二 大赦トハ其大赦令ニ示サレタル罪囚チノ
 罪ト刑トチ共ニ消滅シテ復罪臭チ帶ヒシメサル
 モノナリ特赦ハ單ニ刑ヲ消滅セシムルニ止リ罪
 ハ依然其身ニ存ス
 第三 右ノ理由アルニ依リ大赦ニ逢シモノ復タ
 罪ヲ犯スモ再犯チ以テ之ヲ論セズ特赦ヲ受ケタ
 ル者再ヒ罪ヲ犯セハ再犯ヲ以テ之ヲ論ス

第四 大赦ヲ受ケシ人ハ當然復權チ許ス之ニ反
 シ特赦ヲ得タルモノハ必ス特赦狀ニ復權ノヲヲ
 明示セサル可カラス
 第五 大赦ハ罪ノ判然セサル際ニ於テモ之ヲ行
 フヲ得特赦ハ必ス罪ノ確定セタル后ニアラサレ
 ハ之ヲ行フコトナシ

佛蘭西白耳義等ノ制度ニ依レハ獨リ特赦ノ權ヲ
 認ムルノミニシテ大赦權ヲ認メス蓋其狹隘ニ失
 スルモノナカラシカ本朝ニ於テ大赦令アルハ古
 來史上ノ掩フヘカラサル事實ナリ

(口) 減刑及復權

減刑トハ罪刑共ニ全除セラル、ニアラサルモ其

改心ノ狀著シク又長久ノ囚獄ハ無益ナル等ノ場
 合ニ當リ其刑期ヲ減スルモノニ復權トハ刑ノ宣
 告ニ依リ公權ヲ剝奪セラレタル者ヲ回復スルノ
 謂ニ共ニ既定裁判ノ効力ニ關スルモノナレハ天
 皇獨リ之ヲ命スルノ權アルモノトス但公權ノ何
 タルヲ詳ニセント欲セハ日本刑法第三十一條
 ニ明定セリ(一)國民ノ特權ニ官吏ト爲ルノ權三、教養年金位記賞恩給
 權六、裁判ニ於テ証人トナルノ權七、後見人トナルノ權八、分教管ノ管財人トナ
 リ又ハ會社及ヒ共有財産ヲ管理スルノ權九、學校長及ヒ教師學監トナルノ權)
 攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ
 攝政ハ天皇帝親ヲ行ハセラレサルノ大故アルニ
 當リ之ヲ置カセラル、モノニシテ至尊ニ代テ政務ヲ

第十七條 攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル

攝政
第十七條

執ルモノトス故ニ天皇ノ名ヲ以テ大權ヲ行ヒ其政令
 天皇ニ出ルト毫モ効果ヲ異ニスルコトナク又決テ責任
 ヲ負ハサルナリ要スルニ攝政ノ行フ處ハ正ニ是レ天
 皇ノ行ヒ給フ處ニシテ之ヲ二途ニ區別スル能ハス然
 レモ獨リ天皇ノ政事ニ異ナルノ點ハ憲法第七十五條
 ノ制限アルコト即之レナリ蓋皇室ノ安泰ヲ保シ國家ノ
 安寧ヲ全フスルニ欠クヘカヲサルノ制限ナリ本條攝
 政ヲ置カル、ノコトハ獨リ皇室ノ典範ニ屬スルコトニシ
 テ固ヨリ臣民ノ議スヘキ限リニアラス是ヲ以テ皇室
 典範之ヲ定ム然リト雖モ攝政ニシテ主權ヲ行フモノ
 ハ實ニ憲法ノ基本ニ關ス是即本章天皇ノ大權ヲ定示
 スルニ當リ附シテ本條ヲ制定セラレタルモノナラン

今ヤ本章ノ解ヲ了ルニ臨ミ一言以テ讀者ニ注意セサルヘカラサルモノアリ已ニ本章一條以下其第十六條ニ至ルノ間ニ於テ天皇大權ノアル處ヲ示シ又以テ親ヲ制限サセ給フノ理ヲ發見シタリ余輩ハ讀者ト共ニ其至德ニ感セサルヲ得ス夫レ然リ而ノ本章ハ天皇大權ノ存スル處ヲ明示シ特ニ其重要ナルモノヲ制定セラレタルモノニシテ本章ノ制定ニ係ル制限ヲ親ヲ守ラセ給フノ外ハ凡百ノ何ヲ爲サントシテ爲シ能ハサルコトナキ何ヲ行ハント欲シテ行ヒ能ハサルコトナキノ理ヲ悟ラサルヘカラス憲法ニ明定スル處ノ外ハ大權ノ及ハサル處ナリト速了スルハ大ナル誤解ナリ讀者ハ各國ノ憲法ヲ見テ彼ノ鑄幣權ノ如キヲ主權者ニ

第二章 臣民權利義務

屬セシムルノ明文アルヲ知ラルヘシ而ノ本邦ノ憲法之ヲ明示スル處ナリ然ラバ天皇ハ鑄幣ノ權ナキカ曰ク否ナ前已ニ述ルカ如ク本章制限ヲ守ラセ給フノ外何事カ陛下ノ大權ニ屬セサル者アランヤ是ヲ以テ是等ノ特權ヲ有セラル、コト固ヨリ疑フニ足ラサルナリ

舊紀ニ溯リ本邦民權ノ發達ヲ繹ヌルニ漠トシテ之ヲ證明スルニ甚々難キヲ覺フ然レモ孝德天皇ノ朝ニ在テ鐘ヲ懸ケ匱ヲ設ケ以テ民間ノ奏議ヲ納レサセ給ヘルコトハ人民ヲシテ間接ニ政議ニ與カラシムルモノニシテ民權ヲ愛重セラレタルコト明カナリ又大寶ノ新律新令ノ如キハ進テ人民

ノ權利自由ヲ保愛セラレタルノ至意ニ出ルチ見ル之ヲ要スルニ本朝祖宗ノ大政ハ專ラ臣民ノ權利ヲ愛重セラレタルコトハ其跡ヲ證スルニ足レリ然ルニ中古武門政柄ヲ弄スルニ當リ民權愛重ノ主義ハ雲散霧消シテ又其跡ヲ止メス其發達ヲ殺滅シタルコト實ニ之レヨリ甚クシキハナレ民ニ士民ノ別ヲ生シ獨リ公權ヲ剝カレタルニ止ラス併セテ私權ヲ奪ハレタルモノ亦尠カラズ王政維新ノ大業始メテ成ルニ及ンテ大政朝廷ニ皈シ爾來漸々民權ヲ愛重スルノ主義ヲ回復セラレ吾人ヲシテ恰モ雲霧ヲ開テ始メテ天日ヲ仰クノ感アラシムルニ至レリ即チ已ニ刑法治罪法ノ實施セラル、アリテ吾人ノ權利ヲ保護セラル、ガ如キモノ亦尠シトセス然ルニ又今日憲法ヲ欽定セラレ吾人カ享有

スヘキ數多ノ權ヲ千載不拔ニ保明セラル、モノハ實ニ陛下慈仁ノ至意ニシテ吾人ハ謹テ其厚賜ニ答ヘサルヲ得ス「トニセン」氏曰ク人世事業ノ變遷常ナラサルヤ今日自由公明ノ政府ヲ戴クモ明日專制政府ノ下ニ立タサルヲ得サルモ亦知ル可ヘカラズ決シテ專制擅治ニ復舊セサルヲ保証スルチ得サルナリ憲法ハ乃チ此變遷常ナキヲ維持固定シ將來ノ危殆ヲ防備スルノ目的ニ出ツ云々ト亦以テ味フヘシ

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル處ニ依

ル

苟モ日本ニ生レ籍ヲ日本ニ有スルモノハ日本臣民タル資格ヲ有スルコト疑ナシト雖用或ハ外國人ノ日本ニ

販化スル者又ハ外國人ト結婚スル者等ノ資格ハ法律ノ定ムル要件ニ從ハサルヲ得ス是等ハ總テ民法ニ規定スヘキモノナレハ本條ニ於テハ單ニ法律ノ定ムル處ニ依ルト記載シ之ヲ民法ニ讓リタルナリ本邦民法ノ發布モ近キニ迫レリ其發布ヲ待テ本條ハ完全ヲ告クルモノト云フテ可ナリ

第十九條

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル處ノ資格ニ應シ均ク文武官ニ任セラレ及其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

本邦維新以前ヲ回顧スレハ門閥ヲ以テ官職ヲ汚シ才能智識ハ殆ト其用ナキニ至リ因襲ノ久キ人文ノ發達ヲ妨ケ公民ノ福祉ヲ害シタルヲ蓋シ諒シトセス門地

門閥ノ弊習ヲ破却シ人材名士ヲ登用スルノ制ヲ布カレタルハ一ニ維新ノ大効ニシテ民權ノ平等茲ニ至テ稍回復スルヲ得タリ余輩佛國大革命以前ノ國狀ヲ察スルニ其跡殆ント之レニ類スルモノアルヲ知ル佛國ハ貴族僧侶平民ノ三族ニ區別セラレ門閥ノ貴賤ニ依リ畢生ノ榮辱ヲ因襲シ來リシニ千七百八十九年ノ立憲議會ニ於テ人ハ自由ニ生活シ權利ハ悉ク平等ナリトノ主義ヲ明示シテ此因襲ヲ脱却セリ一ハ以テ天皇ノ手ニ成リ一ハ以テ議會ノ手ニ成リタルノ差アリト雖其舊弊ヲ脱シテ民權平等人材登用ノコトヲ布告シタルノ事跡ニ至テハ二者決シテ異ナルコトナシ而シテ本條ニ於テハ日本臣民ハ日本ノ文武官職ニ任用

セラレ又議會府縣會市町村會等ノ議員ニ撰舉セラレ
 公ケノ職務ヲ執ルノ權ヲ有スルコトヲ示シ臣民ノ權利
 均一ナルコトヲ保明セラレタリ但本條ニハ一ノ要件ト
 一ノ制限アルヲ知ラサルヘカラス要件トハ何ソヤ曰
 ク日本ノ臣民タル身分條件トハ何ソヤ曰ク法令ノ定
 ムル資格之レナリ第一ハ一國ノ政務ニ當ルノ官吏ハ
 誠忠愛國ノ赤心アルヲ要ス苟モ日本ノ臣民ニアラサ
 レハ其赤心ヲ保スルニ難シ第二ハ學術能力等ノ全備
 セサルモノハ以テ官職公務ヲ全フスルニ難シ故テ以
 テ應試ニ及第スルコト或ハ男子ニシテ丁年以上ナルコ
 其他法令ノ定ムル資格ハ之レニ從ハサルヲ得ス外國
 人ヲシテ樞要ノ官吏タラシムルヲ得サルハ獨立國ニ

第二十條
 兵役ノ義務

於ケル正則ナリト雖モ彼ノ教官技術師譯官ノ如キニ
 之ヲ備聘スルハ本邦ニ於テ實例アル所ナルモ是レ一
 時ノ使用ニ止ムルモノニシテ本條日本臣民ノ公權ヲ
 與ヘタルモノト誤解ス可ラス

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義
 務ヲ有ス

日本ノ臣民ハ護國ノ責任アリ是ヲ以テ法律ノ定ムル
 處ニ依リ其兵役ニ服セサルヘカテサルハ國民タルモ
 ノ、一大義務ナリトス若シ夫レ兵役ニ服スルモノヲ
 シテ定族就兵ノ主義ニ倣ハシメ兵役ハ或種族ノ專有
 タラシムルニ至テハ權力自ラ其種族ニ皈シ吾人ノ自
 由ハ又地ヲ拂フニ至ランノミ而シテ其徵兵ノ法令ハ宜

シク別ニ之ヲ定ムヘキモノニシテ本邦現ニ徵兵令ノ
存スルアリ其制殆ト李魯士ニ同シクシテ國民皆兵ノ
主義ヲ取ルモノ、如シ

第二十一條

納税ノ義務

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有ス

納税ハ護國兵役ノ義務ト均ク日本臣民タル者ノ國家
ヲ維持スルカ爲メニ供用スヘキ一大義務ナリ議者多
クハ祖税ノ性質ヲ論極シ政府ニ對スル保護ノ報酬ナ
リト云フ蓋シ其論據ヲ誤ルナカラシカ余ヲ以テ之ヲ
見レハ臣民ノ納税ハ國家ノ公費ヲ分擔スルモノニシ
テ共同生存ノ用ニ充ツルモノニ外オラス是ヲ以テ或
ハ其保護ノ不満足ナル点アリト雖モ國家共存ノ經濟

上ニ費ス處ノ公費ハ總テ之ヲ分擔セサルチ得ズ余輩
ハ曾テ佛國法學博士寶西尊葉「聖」ノ言ヲ記ス曰ク租税
ハ國家ヲ保持スルカ爲メニ設クルモノニシテ政府ノ
職務ニ酬フルノ代價ニ非ス何トナレハ政府ト國民ト
ノ間ニ一ノ契約アリテ存セサレハナリト此ノ言能ク
余輩ノ理論ニ合ス然リト雖モ余輩ハ保護ヲ薄クシテ
租税ヲ重クスヘシト論スルニアラズ古來官民ノ軋轢
ハ主トシテ課税ノ當否ニ在リ尤モ戒ムヘキノ至リナ
リ而シテ本條ハ單ニ其納税ノ義務ヲ示スニ止マラス法
律ニ定メタル處ニ從ヒノ文字アルヲ見ル故ニ議會ハ
其法律ヲ論議スルノ權アレバ間接ニ人民ノ利益ヲ保
護シ公費浪用ヲ防クヲ得ルモノナリ

第二十二條
居住及移轉ノ自由

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

人各自由ヲ有ス己レノ意ニ適シタル地ヲ撰定シ往來去住シテ其産業ヲ營ミ其生ヲ樂ムモノハ人間生活上實ニ大切ナルモノニシテ之ヲ稱シテ動行ノ自由ト云フ讀者ハ近ク本邦ノ例ヲ回顧シ其封建時代ニ行ハレタル動行ノ自由ニ制限アリタルヲ知ラル、ナルヘシ當時ノ制限甚シカリシヲハ僅カニ小山一川ヲ隔テ、其隣國ノ地界ニ接スレハ已ニ動行ノ自由ナキニ至レリ况ヤ外國ニ移住スルノ自由ヲヤ蓋世ノ開明ハ人生ノ自由ヲ喚起スルモノニシテ人文漸ク進ムニ隨テ動行ノ自由亦漸ク發達セサルナシ本邦ノ如キ明治昭代

第二十三條

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監

ニ在テ已ニ動行ノ自由アルヲ明カナリト雖更ニ之ヲ國憲ニ掲ケテ不朽ニ傳フルモノハ臣民ノ自由ヲ重愛セラル、ノ厚キニ出ツ但住居移轉ニ關シ法律特ニ定ムル處ハ固ヨリ之レニ從ハサルヘカラス例セハ保安條例ニ依リ退去ヲ命セラレタルモノハ東京ニ住居スルヲ得サルカ如キ又娼妓ノ目的ヲ以テ外國ニ渡ルヲ許サ、ルカ如キハ其例ナリ彼ノ孛魯士ノ憲法ハ頗ル動行ノ自由ヲ敬重シタルヲ覺フ曰ク外國ニ移轉スル權利ハ兵役ノ故ニ非サルヨリハ政府之ヲ制限スルヲ得ス又外國ニ移轉スル者ニ對シ移轉税金ヲ徵スルヲ得スト

禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

本條ハ人身ノ自由ヲ保明スルモノニシテ吾人ノ自由中最モ愛重スヘキモノトス吾人ハ法律ノ式ニ從フ處ノ令狀ヲ示サ、レハ何人ニ對シテモ逮捕ヲ拒ムノ權利アリ吾人ハ法律ニ適シタル拘留狀收監狀等ヲ發セラル、ニアラサレハ謂レナク拘禁セラレサルノ權利ヲ有ス又法律ノ定メタル手續ニ依ラサレハ何人ト雖吾人ヲ糾問シ又處罰スルノ權利ナシ獨リ吾人カ身體ノ自由ハ法律ニ於テ一步ヲ讓ルノミニシテ其他毫末モ侵サル、ノ責任ナシ讀者モ知ル如ク武門政治ノ下ニ立チタル人身ノ自由ヲ追懷スレハ實ニ筆スルニ忍ヒサルノ跡アルニアラスヤ獨リ其故實ハ本邦ニ存

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシ

スルノミナラス泰西各國其自由ノ春ヲ迎ヘタル泉源ニ溯レハ悉ク然ラサルハナシ維新以降本邦ノ制度日ニ新ニ又月ニ新ニシテ爾來近年ニ及ビ刑法ニ治罪法ニ人身ノ自由ヲ保護セラル、ト勢カラス遂ニ憲法ニ於テ不朽ニ之ヲ明示セラル、ニ至リタリ吾人人身ノ自由此ニ至テ確然保明セラタレリ(現行刑法第百三十一條以下參看)

吾人ハ法定ノ裁判官ヲ除キ他ニ如何ナル名義ヲ有スルモノヲ生出スルモ決シテ裁判ヲ受クルノ責任ナシ凡ソ適法ナル裁判官ハ不羈獨立公正不偏ナルヘキトハ憲法ノ保明スル處ニシテ吾人ノ確信スル處ナリ若

シ不幸ニシテ泰西歴史ノ示スカ如キ政府特別ナル法
官ヲ組織シ其反對スルモノヲ處罰スルカ如キコアラ
ハ吾人ノ生命財産ハ又何ニ依テカ保護セラル、コヲ
得ンヤ吾人ノ生命財産ハ獨リ獨立公正ナル適法ノ法
官ヲ措テ他ニ保護ヲ托スヘカラサルナリ是即本條ノ
設アル所以ニシテ吾人ノ權利ヲ愛重セラレタルノ致
ス處ナリ

第二十五條
家宅不侵

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外
其許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラル、コ
トナシ

格言ニ曰ク各人ノ家宅ハ是レ其城郭ナリ又曰ク匹夫
モ其家ニ在テハ王侯ナリト吾人ノ家宅ハ尙一國ノ城

郭ニ於ケルカ如ク何人ト雖モ容易ニ之ニ侵入スルコ
能ハサルヲ云フモノニシテ文明諸國ノ最モ重スル處
ノモノナリ若シ夫レ何人ト雖モ吾人ノ家宅ニ亂入シ
拘引搜索其意ノ如クナルモノトセハ吾人ノ自由ハ常
ニ安靜ナルノ時ナカルヘシ蓋家宅不侵ノ大則ハ人間
生存ノ途ニ於テ須臾モ欠クヘカラザルモノト云ハサ
ルヲ得ス現ニ我邦ノ刑法ニ於テハ其第七十一條第
百七十二條ニ於テ故ナク人ノ邸宅ニ侵入スルモノヲ
罰スルノ明文ヲ掲ケタリ吾人ノ家宅ハ城郭ニシテ容
易ニ侵スヘカラサルコト夫レ斯ノ如シ然レモ左ノ場合
ニ於テハ例外ト爲サル、ヲ得ス

一 法律ニ定メタル場合

豫審判事カ檢証ノ爲メ家宅ヲ搜索スル場合及司法警察官カ令狀ヲ執行シテ罪人ヲ拘引セント爲ル場合等ハ假令家人ノ承諾ナキモ之ニ侵入シ之レヲ搜索スルヲ得ルモノトス格言ニ曰ク一人ノ權利ハ社會ノ公權ニ讓ラサル可カラスト其レ之ヲ云フカ然レモ是等ノ權力者モ法律ノ式ヲ履ミ又其制限ヲ守ラサルヘカラス然ラサレハ家人ノ之ヲ拒ムコトアルモ又如何トモ爲スヘカラサルナリ

參看日本治罪法第三百三十三條第六十二條

二 家人ノ承諾アリタル時

縱令法律ノ正式ニ違ヒタルコトアルモ家人ノ承諾ヲ得タル以上ハ其家宅ニ侵入スルモ敢テ差支ナキモノト

ス何トナレハ家人ハ之ヲ拒ムノ必要ナク自己ノ權利ヲ讓リテ他ノ必要ヲ充タシメントノ好意ニ出ルモノナレハ憲法ノ之ヲ制スル限りニアラサレハナリ

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外

信書ノ秘密ヲ侵サル、コトナシ

信書ノ秘密ハ近世文明ノ恩賜ニシテ歐洲各國ノ既ニ許ス處ナリ苟モ通信自在ナラサレハ以テ己レヲ利シ以テ世ヲ益スルノ方便ヲ欠キ人文ノ發達ヲ妨ケ社會ノ進化ヲ害スルコト蓋抄少ナラサルナリ是ヲ以テ信書ハ秘密ニシテ侵スヘカラサルノ權利ヲ享有スルハ人間生存ノ途ニ於テ亦欠クヘカラサルモノナリ特ニ信書配達ノコトニシテ政府ニ專屬セシムルノ邦土ニ在テ

ハ必ス其秘密安全ヲ保明スルノ憲法ナカラサルヘカ
ラス若シ夫レ正當ノ故ナク濫リニ通信ノ書狀ヲ開披
シ吾人ノ秘密ヲ漏泄セラル、ニアリトセハ商業上ノ
獨立安全ノ念ヲ危カラシメ政治上ノ通信ヲ妨害シ驛
遞官吏ノ爲メ政黨ノ秘密ヲ摘發セラル、ニ至リ立憲
政治ノ公明ヲ傷クルニ至ルヤ必セリ是レ本條明カニ
信書ノ秘密ヲ保護セラレタル所以ナリ然レモ信書秘
密ノ權ト雖モ亦法律ニハ一步ヲ讓ラサルヘカラス本
邦現行ノ法律ニ據テ之ヲ例スレハ左ノ場合ノ如キハ
其秘密權ヲ侵サル、モ亦已ムヲ得サルナリ

一 治罪法第百六十九條豫審判事ハ事實發見ノ爲
メ(中略)書類電報又ハ物件ヲ開披スルヲ得(以下略

ス)

一 集會條例第八條(上略)他ノ政社ト連結通信ス
ルヲ得ス

是等ノ場合ト雖モ其任ニ當ルモノハ宜ク注意セサル
ヲ得サルハ勿論又其豫審判事特權ノ如キハ已發(已ニ
發生シタル)ノ事件ニ對シ行フヘキモノニシテ未發事件探
偵等ノ爲メ信書ノ秘密ヲ侵スノ權利ヲ有セサルナリ

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナ

シ

公益ノ爲メ必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル
吾人カ社會ニ立チ生命ヲ全フシ幸福ヲ享ルコトヲ得ル
モノハ吾人ニ財產アリテ之ヲ助成スレハナリ若シ夫

第二十七條
所屬權ノ不侵

レ吾人ノ財産ニシテ所有權ノ安固ヲ保明スルモノナ
 ケレハ其危殆實ニ名狀スベカラサルニ至ラントス是
 レ即本條ニ於テ其安固ヲ保明セラレタル所以ナリ抑
 所有權ハ使用収益處分ノ三權ヲ隨意ニ爲シ得ラルヘ
 キモノナレハ自己ノ所有物ヲ如何ナル方法ニ使用ス
 ルモ又如何ナル方法ニテ其所有物ヨリ収益スルモ又
 之ヲ賣却交換スルモ固ヨリ其權利ニシテ他ノ敢テ干
 渉スヘキ限リニアラサルナリ所有權ノ侵スヘカラサ
 ルコト斯ノ如シ然レモ其侵スヘカラサルトノ原理ヲ以
 テ直チニ所有權ハ無限ナリト速了スルハ甚ダ誤レル
 モノナリト云ハサルヲ得ス所有權ハ決テ無限ニアラ
 ス公益ノ爲メニハ一步ヲ讓ラサルヘカラス言ヲ換ヘ

テ之ヲ云ヘハ或ル場合ニハ制限ヲ受ケサルヲ得ス是
 即本條第二項ノ存スル所以ナリ今其制限ノ一二ヲ例
 証スレハ左ノ如シ

(イ) 公益ノ爲メ所有權ノ使用ヲ制限セラル、ノ
 場合

例ハ陸軍防禦線若クハ鐵道線路ニ沿フテ若干ノ距離
 アルニアラサレハ建築土工ヲ禁シ樹木ノ培植ヲ許サ
 、ルカ如キ或ハ埋葬地所ヲ距ルコト幾千ノ地外ニ在ラ
 サレハ井ヲ堀ルコト能ハサルカ如キ若シ是等ノ法律ニ
 シテ存スルアラハ所有者ハ其制限ニ從ハサルヲ得ス

(ロ) 公益ノ爲メ収益權ヲ制限セラル、場合

例ハ森林ノ處有者ハ森林法ニ從ハサレハ濫リニ之ヲ

開拓スヘカラサルカ如キ又礦物アル土地ノ所有者ハ政府ノ許可ナクシテ採掘スルヲ得サルカ如キハ皆其國家ノ富源ヲ保ツモノニシテ公益ノ以テ私益ヲ壓スル一例ナリ

(ハ) 公益ノ爲メ處分權ヲ左右セラル、ノ場合

例ハ公道開設鐵道布設ノ爲メ沿道ノ土地ヲ公用買上法ニ依テ買取セラル、其所有者ハ之ヲ拒ムコト能ハサルヘシ

(ニ) 地役ノ爲メ所有權ヲ制限セラル、ノ場合

例ハ自己ノ所有地内ニ四面取圍マレタル地所ヲ所有セルモノアリタル其ハ相當ノ償ヲ得テ其通路ヲ貸サ、ルヘカラサルノ義務アリ又耕作改良ノ爲メ至要ノ

用水ヲ引クニハ近隣ノ土地ヲ經過シテ之ヲ其地ニ致スノ權ニ依リ其經過ノ地ヲ所有スルモノハ水管ヲ埋ムルノ地ヲ貸サ、ルヘカラサルカ如キ亦其一例ナリ是等ハ他日民法ニ於テ制定セラル、處ナラン

(ホ) 罰金及沒收ニ依リ所有權ヲ制限セラル、ノ

場合

罪人ニ對シ罰金ヲ科シ又犯罪ノ用ニ供シタル被告人ノ所有物及法律ニ於テ所持ヲ禁スル物件ヲ沒收スルカ如キハ皆其所有權ヲ制限スルモノナリ然レモ犯罪ノ爲メ家財ヲ擧ケテ沒收スル刑ノ如キハ古代ニ行ハレタル不法ノ處分ニシテ文明各國ノ見テ以テ非法ト爲ス處ナリ是ヲ以テ刑ハ一身ニ止ルトノ格言ハ又法

律ノ尊重スヘキモノタルヤ明カナリ

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タル

ノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

信教ノ自由ハ人生本源ノ權利ニシテ政界上之レニ干渉スヘキモノニアラス若シ夫レ一國ノ宗教ヲ定置シ臣民チシテ必ス之ヲ奉セシムルモノトセハ其正道ニ反スルハ勿論社會ノ紛亂ヲ釀成スルヲ誠ニ明カナリ夫レ信教ノ自由ハ人心ノ内部ニ存スルモノニシテ内部ノ機能關係ハ外部ノ關係ヲ支配スル法律ノ敢テ干渉スヘキモノニアラサルヲハ何人ト雖モ已ニ疑ハサル處ナリ而シテ政府宗教ヲ定置シ法律ヲ以テ國民之レヲ奉スヘシト爲スルハ其内部ノ自由ヲ侵シ支配ス

ヘカラサルノ機能ヲ支配セント欲スルモノニ正理ニ反スルモノニアラスシテ何ソ况ヤ心ニ信セサルノ宗教ヲ法律強テ奉行セシメントスルハ或ハ國法ニ迫ラレテ一時之ヲ表面ニ奉スルモノアランモ内心決テ之ヲ信仰スルモノナク其極途ニ社會ノ紛亂ヲ生スルヲ泰西歴史ノ悉ク示ス處ナリ歐洲各國ノ制度沿革アル毎ニ宗教ノ密接關聯シテ古今政治上ノ紛亂ヲ生シタルヲハ實ニ吾人想像ノ外ニ出テ千載歴史ノ汚点ト爲ルニ至レリ然レモ佛國ノ大革命北米ノ獨立ニ至リ信教自由ヲ公然宣告スルニ及ヒ漸次歐洲各國ノ是認スル處トナリ實際上ニ國憲上ニ信教ノ自由ヲ保明セサル處ナキニ至レリ唯往々其國狀及教育等ニ依リ

依然一派ノ宗教ニ隨喜スル處アルノミニシテ決テ國法ニ於テ宗旨ヲ定置スル處アラサルナリ本條ニ於テハ之ヲ既往ノ歴史ニ徵シ又將來ニ鑒ミ以テ人生本源ノ權利ニ屬スル宗教ノ自由ヲ保明セラレタリ然レトモ常ニ「宗教ニ從事スルニ因テ生シタル治安ヲ妨害スルノ行爲ハ政權ニ於テ之ヲ懲罰スルヲ得ルノ權チ有スル」ヲ忘レサルヘカラス左ニ之ヲ述ン

日本憲法ハ明ニ信教ノ自由ヲ保明シタリ然レモ之ヲ保明スルト同時ニ其臣民カ宗教ニ從事スルニ依リ外部ニ發顯スル行爲ニ日本ノ安寧秩序ヲ妨ケ或ハ日本臣民タルノ義務ニ背カサルヲ以テ信教自由ノ限度ト爲セリ故ニ信教ノ自由ト雖モ已ニ内部ノ範圍ヲ脱

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作

印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

シテ外部ノ處爲ニ顯ハル、處ノ禮拜演說集會結社等ハ固ヨリ法律ノ制限ニ從ハサルヲ得ス又何等ノ宗門ト雖モ君臣ノ大義ヲ忘レ父子ノ秩序ヲ亂リ總テ國家ニ對スル臣民ノ義務ヲ逃ル、ヲ許サ、ルナリ若シ夫レ是等ノ宗教本邦ニ興起スルヲアラハ政權ハ之レニハ干涉シテ其宗門ヲ禁スルノ權利ヲ行フヘシ

思想ノ交通ヲ自由ナラシメ人文ノ進化ヲ謀リ政治ノ改良ヲ促スモノハ人生共存ノ途ニ於テ實ニ有益ナル資本ニシテ吾人ノ愛重スヘキ自由ナリトス今之ヲ大別スル時ハ左ノ二種ニ過キス

第一 言論ノ自由

第二 會合ノ自由

此ノ二個ノモノ、細別ハ即チ本條ニ掲タル數種類ナルヲ以テ其何レノモノハ何レニ屬スルカヲ示サン

第一種

一 言論ノ自由

二 著作ノ自由

三 印行ノ自由

著作印行ハ言論ノ一方法タルニ過キス何ントナレハ著作ハ意匠ヲ纏綴シテ思想ヲ示スニ在リ印行ハ言論著作ヲ刊行シテ公布スル方法ニ過キス然ラハ口述論議シテ思想ヲ顯ス言論ト相異ナラス只其体ヲ固シテ

裝具ヲ異ニスルト一般ナルノミ

第二種

一 集會ノ自由

二 結社ノ自由

集會トハ之ヲ結束スルヲナクシテ一時會合スルヲ云ヒ結社トハ一タヒ相結合スルニ於テハ之ヲ解クニ至ルノ間ハ常ニ繼續スルヲ云フ

以上ハ理論ノ區別ヲ示サンカ爲メノミ以下將ニ各自ニ之ヲ分説セン

(イ) 言論ノ自由

人各思想アリ思想ニシテ世ヲ益スルモノハ各之ヲ隨意ニ談論シ以テ其進化ノ途ヲ謀ルノ自由ナカラサル

ヘカラス凡社會人心ノ腐敗ヲ醫シ輿論ヲ喚起スルノ最モ切ニ最モ烈ナルモノハ公衆ニ對シ雄辯ヲ振フニ如クモノナシ辨ヲ振フテ世弊ヲ論スルハ言論自由ノ許ス所ニシテ其効亦大ナリ

(ロ) 著作ノ自由

各自ノ思想ヲ叙述シ各自ノ意匠ヲ纏綴シ政治學術小説ニ至ル迄自由ニ其所思チ著作スルハ文明社會ノ最モ貴重スル處ニシテ殊ニ先進ノ卓見ヲ後進ニ授ケ今人ノ智識ヲ後世ニ傳ヘ時トシテハ政府ノ通弊ヲ叙シ時トシテハ社會ノ事蹟ヲ紀シ以テ現在未來ノ人ヲシテ其志望ト事實トヲ明知セシムルモノ著述ノ方法ヲ措テ他ニ之カ明案アラサルナリ古來政事上ノ著述者

ノ如何チ回顧スレバ又憐ム可キ境遇ニ際セサルモノナシ我邦ノ如キ近古政治ノ事チ著作スルモノ絶テナキニアラズ彼ノ「頼山陽」ノ如キハ能ク其一家ノ見識ヲ以テ時弊ヲ論談スルニ憚ラサルモノ、如シ然レハ當時政家ノ箝制甚々猛烈ニシテ著述ノ自由其範圍頗ル狹隘ナリシカ爲メ其當代ノ事チ叙スルニ當リテハ多クハ其思想ニ反シ正理ヲ枉クルモノアルヲ見ル今憲法ニ於テハ明カニ此自由ヲ確保セリ將來著述家ノ大幸ニシテ亦國家ノ大慶ナリト云フ可キナリ

(ハ) 印行ノ自由

著作ノ自由アリト雖モ之ヲ印行スルノ自由ナケレハ固ヨリ著述家ノ目的ヲ達スル能ハズ况ンヤ文明社會

ニ最モ行ハル、處ノ新聞雜誌ノ如キニ至テハ一ハ以テ言論ノ自由ノ補足トナリ之ヲシテ周知セシムルノ機關ヲナシ一ハ以テ治者ト被治者トノ間ニ於ケル快捷勤勉ナル中立ノ明鏡タリ印行ノ自由ハ亦吾人共存ノ途ニ於テ暫クモ欠クベカラサルモノナリトス

(二) 集會之自由

公衆ニ向テ滿腔ノ思想ヲ演ヘント欲スルモ集會ノ自由ナケレハ其目的ヲ達スルニ途ナク共同集會シテ智識ヲ交換シ政治ヲ談論シ人文ノ進化ヲ助ケ政治ノ改良ヲ謀ラント欲スルモ皆此ノ自由ノ存スルアラサレハ又決シテ其目的ヲ達スル能ハサルナリ集會ノ自由其効亦偉大ナラスヤ

(ホ) 結社之自由

人類ノ社會ヲ結フモノハ一人孤立シテ生存スルヲ得サレハナリ結社ノ理亦之レニ外ナラス一人ノ微力他ノ障碍ノ爲メ其目的ヲ達スル能ハサルモ共同團結ノ協力ヲ以テスレハ物體世界ノ事業何事カ成ラサランヤ政治商工教育技藝ノ盛衰興敗ハ悉ク結社ノ力ニ據ラサルハナシ蓋結社ハ天理ニ適シ吾人共存利達ノ本源ナリト謂ツヘキナリ

以上ニ掲ケタル自由ハ吾人ノ尊重スヘキヲ斯クノ如シ然レモ是レ吾人カ此ノ自由ヲ利用スレハナリ若シ夫レ誤テ之ヲ害用スルキハ其効用ハ全ク反對ノ結果ヲ生シ或ハ社會ノ秩序公益ヲ紛亂シ或ハ風俗道義ヲ

破滅スルニ至ルヤ亦知ルヘカラス是ヲ以テ其自由ハ
 多少ノ制限ヲ受ケサルヲ得サルノ理ヲ生ス即新聞紙
 條例出版條例或ハ集會條例等ノ存スル所以ナリ故ニ
 苟モ法律アリテ之ヲ制限スルノ點ハ宜ク吾人ノ遵守
 スヘキ處ニシテ憲法上法律ノ範圍内ニ於テノ明文ア
 ル所以ナリ
 終ニ望ミ自由トハ何ソヤ又其範圍如何ヲ短簡ニ説カ
 シ蓋シ有用ノ事ト信スレハナリ
 抑々自由トハ人ノ心神ノ働キヲシテ其目的ヲ遂ケシ
 ムル行爲ノ障礙ヲ受ケスシテ行フヲ得ルヲ云フ然レ
 吾人ハ未開蒙昧ノ時ヲ去リ人文進ミタル今日ノ社
 會ニ生存スルヲ以テ須臾モ法律ノ下ニ在ラサルヲ得

ス是ヲ以テ自由ナルモノハ自ラ其範圍ヲ生シタルナ
 リ故ニ苟モ法律ノ下ニ在ル限リハ法ノ制禁セサル以
 内ニ於テノ行爲ニアラサレハ眞ノ自由ト爲スヲ得ス
 若シ夫レ其範ヲ越フルハ自由ニアラスシテ之ヲ擅
 行ト云フ可シ世人自由ノ貴重ヲ知ツテ其範圍ヲ知ラ
 サルハ思ハサルノ災害ヲ招ク可シ誠ニ警誡セサル
 可ケンヤ

第三十條
 請願ノ自由

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル處
 ノ規程ニ從ヒ請願ヲナスヲ得

請願ノ自由ハ忠良ノ臣民ヲシテ下情ヲ吐露シ執政者
 ニ其苦楚ヲ訴白セシムルモノニシテ亦人生必要ノ權
 利ナリ古來官民ノ間隔絶甚シク下民ノ情實貫徹セサ

ルガタメ社會ノ實益ヲ害スルコト往々之レアリ是即請願ノ自由ナカラサル可カラサル所以ニメ本條ニ於テ之ヲ吾人ニ與ヘタルハ憲法ノ民權ヲ愛重シ陛下ノ臣民ヲ愛護セラル、ノ厚キニ出ツルモノト云ハサルヲ得ス然レモ請願ノ權ハ宜ク平和穩當ノ手段ヲ以テ之ヲ利用セサル可カラズ苟モ敬禮ヲ失シ條例ニ背キ腕力ヲ利用シテ之カ手段トナスコトアラバ請願ハ變シテ一ノ脅迫トナランノミ本條ニ於テ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル處ノ規程ニ從ヒト明言セルハ正ニ請願ノ權利ニ於ケル正當ナル權限ト云フヘシ彼ノ佛國革命ノ際數千ノ請願人兇器ヲ携ヘ騒然議院ニ來集シ噪狂強迫シテ法章ヲ口授シタルカ如キハ全ク請願ノ性

質ニ反シ其權利ヲ害用シタルノ的例ナリ叙シテ此ニ至リ人民ノ請願シ得ベキコト果ノ如何ナルコトヲ含有スルモノナルヤチ吟味スルニ佛國バンシヤマンコンスマン氏ガ議院ニ於テノ演舌中少ク參看ス可キモノアルガ如シ曰ク地方ノ利害ニ關スル請願曰ク各個人ノ利害ニ關スル請願曰ク課税ノ苛酷及官吏ノ專横ヲ彈劾スルノ請願曰ク全國ノ公益ニ關スル建白曰ク贊頌慶賀ノ建言

第三十一條 本章ニ掲ゲタル條規ハ戰時又ハ國家事變

ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

前條迄ノ數條ヲ以テ臣民ノ權利自由ヲ保明セラレタルヲ蓋シ妙シトセス余輩カ眼ヲ以テ之ヲ視レハ立憲

制度ノ國ニ於テ享有ス可キ人民ノ權利自由ハ殆ンド盡セリト云フモ敢テ誣ヒサルヲ知ル而シテ本條ニ於テハ國家非常ノ時ニ際シテハ陛下ノ大權ヲ施行セラ、ニ當リ吾人が權利自由ヲ妨害セラル、モ致シ方ナキコトヲ明示セリ是即非常ノ例外法ナリトス格言ニ曰ハスヤ一私人ノ權利ハ社會公共ノ利益ニ勝タズト若シ夫レ外國ト戰爭ヲナスカ或ハ内亂其他ノ事變アルニ際シ一私人ノ權利自由ヲ妨害センコトヲ恐レ之ヲ鎮定スルノ方法ヲ行ハサレハ國家ヲ擧ケテ他ニ委スルモ未タ知ルヘカラズ是ヲ以テ斯カル場合ニ際シテハ臣民權利ノ一ヲ擧ゲテ犧牲ニ供スルモ國安ヲ保護スルノ目的ヲ達セサル可カラズ蓋シ治國ノ最大

第三十二條

目的ハ國家ノ存立ヲ維持スルニ在リ而シテ天皇ハ其國家ノ統治權ヲ總攬セラル、モノナレハ是等大權ヲ施行スルノ權利ヲ有セラル、ノミナラズ反面ヨリ之ヲ論スルハ國家ヲ維持セラル、ノ一大義務ナリト稱スルモ可ナリ已ニ本條ハ非常ニ處スルノ例外ニシテ此大權ハ決シテ之ヲ弄用ス可カラザルヲ亦言フ俟タス而シテ其濫用ヲ防止スルハ獨リ天皇ノ德義ニ在ヲ存スルノミ

第三十二條 本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ

紀律ニ抵觸セサルモノニ限り軍人ニ準行ス

軍人ハ常ニ軍律ノ下ニ服従スルノ責任アルモノニシテ常人ニ比スレハ其自由ノ範圍稍制限セラレサルヲ

得ズ然レモ尙ホ是帝國臣民タルノ分限チ有スルモノ
ナレバ其軍律ニ抵觸セサルモノハ悉ク前記ノ權利チ
享有スルモノトス例ヘバ軍人ハ集會結社シテ政事ヲ
談スルコト等ヲ計サミルガ如キハ其一例ナリ

第三章 帝國議會

帝國議會トハ貴族院衆議院ヲ合併シタルノ名稱ニシテ本
章ハ其組織及ヒ其權限等ヲ規定セルモノトス夫レ本邦議
會ノ性質ハ泰西諸國ノ議會ト大ニ權限ヲ異ニスルノ点ナ
キニアラス各國ノ憲法多クハ立法ノ大權ヲ以テ國君ト議
會トニ與ヘ行政ノ權ヲ以テ特ニ國君ニ與フルノ制ナリ而
シテ本邦ノ議會ハ天皇ヲ翼賛スルノ機關ニシテ主權ヲ分

第三十三條 帝國議會ノ成立

有スルノ性質ヲ有セス故ニ法案ヲ議スルノ權アリト雖モ
之ヲ制可シ之ヲ執行スルノ權力ナシ然リト雖モ議會ハ立
憲制度ニ於ケル最良最上ノ一大機關ニシテ獨リ立法ノ
ニ干與スルノミナラス一ハ以テ行政權ヲ監査シ一ハ以テ
國民ノ權利ヲ保護スルノ任アルモノナレハ其責ヤ甚ク重
シト云ハサルヲ得ス今我憲法カ帝國議會ニ與ヘタル權限
ノ主タルモノヲ查スレハ法案ヲ議スルノ權及之ヲ提出ス
ルノ權請願ヲ受クルノ權上奏ノ權豫算ヲ監査スルノ權等
之レナリ其詳細ハ各條ニ就テ之ヲ辨明スヘシ

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成
立ス

本條ハ第五條ニ定メラレタル所ノ天皇陛下カ立法權

チ行フニ臣民ノ代表者ノ議會即チ帝國議會ノ構成ヲ制定セラレタルモノニシテ則チ古來學者ノ攻窮ヲ怠ラサル所ノ二局ノ說ヲ採用シ貴族院及ヒ衆議院ニヨリ帝國議會ナルモノヲ組成スルコトヲ明示サレシ所ノ法條ナリ

抑モ一局即チ臣民衆庶ノ代議會ノ一個ト爲スコト二局即チ臣民ヲ二個ニ區別シ一ヲ貴族若クハ元老ト爲シ一ヲ衆庶ト爲シ其各代議會ヲ各個ニスルコトニ付テハ古來學者ノ間ニ利害得失ノ論アリ今其論旨ノ主ナル點ヲ掲ケ而シテ天皇陛下カ吾カ國情ニ基キ欽定セラレシ所以ニ説キ及ハントス

第一 一局說ノ利ナリトスル所

- (一) 民庶多數ノ說少數ノ說ニ壓セララル、コトナシ
 - (二) 議事ノ峻速ニシテ曠日ノ患ナシ
 - (三) 議員ノ多數ヲ要セサルニ因リ國幣ヲ空費セス
- 第二 二局說ノ利ナリトスル所
- (一) 甲乙互ニ箝制シテ急激專横ニ流レス
 - (二) 甲乙互ニ名實ヲ重シ議事ヲ忽ニセサルコト
 - (三) 甲乙ノ箝制ハ能ク政治ノ中和ヲ得
- 右ニ掲ル所ノ利益ハ甲ノ利トスル所ハ則チ乙ノ不利トスル所乙ノ利トスル所ハ甲ノ不利トスル所ナリ而シテ一局論者ノ主張スル所ヲ見ルニ其完全ノ論鋒ニ非サルコトヲ發見ス可シ諸フ之ヲ辨セン一局論者ハ第一ニ民庶多數ノ說少數ノ說ニ壓セララルコトナシト述ルト

雖正一人ノ見ル所二人ノ見ル所ノ周匝ナルニ及ハス故ニ地位異ナル兩局チノ反覆審議ヲ遂ケシメ誤認ヲ正シ又一局ノ時トシテ悉ク虚勢ニ傾向スルヲ制肘シテ以テ其完全ヲ求ムルハ實ニ國家ノ長計ニシテ一局説ノ真理ニアラサルヲ知ルニ足ラン第二ニ議事ノ駿速ニシテ曠日スルヲナシト抑モ一物ノ他物ノ制肘ナキハ其分ヲ過クルハ自然ノ勢ニシテ一局議院ニ於テ事ヲ議スルハ或ハ輕躁ニ失シ或ハ自己ノ主義ヲ貫カントシ政綱ヲ紊ルモノアルモ能ク之ヲ防遏スルナクシテハ焉シ能ク國家ヲ泰山ノ安キニ置クヲ得ン須ク國家ハ永久ノ利害ヲ觀察シ全然ノ策ヲ講ス可シ何シ峻速ヲ要スルノミナランヤ第三ニ國幣ヲ空費スルヲ以テ一

局論者ノ干城ト爲スモ一局ノ弊遂ニ國ヲ誤ルニ至ラハ徒ニ浪費ヲ減殺スルヲ得以テ之レヲ償フヲ得ルカ反對論者否ト言ハント欲スルモ言フヲ得サル可シ然ラハ二局ノ利一局ノ利ニ勝ルヲ明カナルヲ知ル可シ之レヲ史ニ徵スルニ一局議院ノ國王ト權ヲ爭ヒ遂ニ暴威ヲ貫カンカ爲メ擾亂ヲ醸シタルモノハ彼ノ佛國ニ於テ千七百八十九年ヨリ千七百九十五年ノ間山嶽黨ノ暴威ヲ專ラニシ路易第十四世ヲ罪人トシ糾翰訊問弑殺シタルカ如キ又西班牙國王ノ一局議院ニ相對シ終ニ千八百二十三年ノ頃互ニ權利ヲ確執シ國王ト民庶トノ紛爭ヲ惹起シ舉歲寧日ナキニ至リシ等ハ是レ國王ト民庶トノ間ニ其確執スル所ノ爭ヲ調停スル

モノナキカ故ナリ
 以上述タルカ如クナレハ一局議院説ノ如キハ只ニ空
 理ヲ稱揚スルノミ能ク其理ト其事トヲ深ク窮メサル
 ニ歸ス我カ聰明ナル天皇陛下ハ此ヲ斟酌シ以テ憲法
 ナ欽定セラル、ニ方リ二局説ヲ採用セラレタルヲ知
 ル可キナリ議者或ハ云ハン至仁ナル陛下ノ慮慮ハ感
 佩ニ餘リアリト雖惟ニ我ニ我國開闢以來皇統一系
 ニノ未タ臣民ノ之ヲ覬覦シタルモノナキハ我國固有
 ノ美ナレハ將來臣民其分ヲ守リ天皇ニ對シ權利ヲ確
 執シ暴威ヲ張ラントスルモノアル可カラズ何ソ二局
 ヲ要センヤト之レ已往ノ實歴ニノミ憑依シ將來ヲ知
 ルノ卓見ナキノ致ス所ニ過キス何トナレハ優渥ナル

陛下ハ已ニ主權ノ一部ナル立法上協賛ノヲテ議會ニ
 與ヘラレタレバ又得臆望蜀ノ諺時アツテ其實ヲ見ル
 ヲナキヲ保シ難シ况ンヤ泰西文物風習ノ漸入日一日
 ニ加ハルヲ以テ激烈ナル民權主張ヲ爲ス者ヲ出スナ
 キヲ保シ難ケレバナリ蓋シ至仁ナル陛下ノ臣民ニ協
 賛ノ權ヲ與ヘラル、ヤ臣民ノ康福ヲ増進シ懿徳良能
 ヲ發達セシメ國家ノ進運ヲ期セラル、ニ在ルヲ以テ
 國家永久ノ利ヲ料理セラレタルヲ知ル可キナリ
 貴族院ハ次條ニ規定セラレタル如ク皇族華族及ヒ敕
 セラレタル議員ヨリ組成セラル、モノニシテ衆議院
 ハ第三十五條ニ規定セラレタル如ク公撰セラレタル
 議員ヲ以テ組成セラレタルモノヲ云フ

愛ニ又説チ爲スモノアリ彼ノ英國ノ貴族院ヲ見ヨ世襲ノ資産ニ安シク國家ノ爲メニ事ヲ議スルニ方リ活潑ノ氣力ニ乏シク常ニ懶惰ニシテ冷淡ナリ殊ニ議事ヲノ澁滞ナラシムルノ弊アリ警誠セサル可カラスト是レ亦國情ニ暗キノ説ニシテ我國ノ如キハ文武廢聖ナル皇帝陛下ヲ補佐シテ維新ノ大業ヲ成シタルモノ概チ皆貴族ニ列シ國運進歩ヲ圖ルハ今仍ホ孜々トシテ怠ラサレハ氣運ノ赴ク所ハ彼ノ英國ノ如クナラサルハ豫メ期ス可キノミナラス彼レノ一時ノ短ヲ見テ以テ俄カニ我貴族院ヲ議スルハ國家ノ長計ヲ知ラサルモノト云フヘシ

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族

華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

歐洲ノ學者二局議院ノ其一局ナル上院ノ組織ニ關シ所説各別レ可否未ダ決セス今之レヲ列舉スレハ
 (甲)ハ曰ク貴族ヲ以テス可シ貴族ハ歷史上ノ位望ヲ有シ君民ノ間ニ立チテ相互ノ侵畧ヲ防遏シテ其權利ヲ扶持スルニ効アリ
 (乙)ハ曰ク富家豪族ヲ以テス可シ富家豪族ハ何レノ國ニモ之レアリ議政ニ預カラントヲ求ムルモノニシテ若シ之レヲ退クル時ハ相謀ツテ國家ヲ亂サン故ニ善美ノ政ヲ好ムモノハ之ヲシテ上院ヲ組成シ政治ノ妨碍ヲ避ク可シ又富家豪族ハ一般衆庶ト異ナルモノナレハ已ニ一般衆庶ノ代議院アル以上ハ富豪ノ代議院

ヲ設ケサル可ラス

(丙)ハ曰ク君撰ノ議官ヲ以テス可シ一般衆庶ノ撰舉ニ掛ル議官ノミナル時ハ自テ君權ノ力單獨トナリ其衡ヲ失フベシ

(丁)ハ曰ク各地方ヨリ撰舉シタル元老ヲ以テス可シ各州相助ケ相頼ルノ餘ニ出テ自主ヲ是認スルモノナリ

(戊)ハ曰ク上院モ亦下院ト同一ニ撰舉シタルモノヨリ組成ス可シ兩局ヲ置クハ政治ヲ圓滑穩當ナラシメンカ爲メナレハ貴族等ノ門族ヲ以テ之レヲ組織シ以テ民權ノ發達ヲ抑制スルカ如キ拙劣ノ趣旨ニ基キタルニアラス

(己)ハ曰ク下院ノ議員ヲシテ下院外ニ之ヲ撰舉セシメ

其當撰ノ者ヲ以テス可シ然ラバ人才ヲ漏スノ恐レナク且ツ下院ノ議員ト互ニ相執拗スルノ弊ナケレハナ

(庚)ハ曰ク實歴アル人ヲ以テ之レヲ組織ス可シ蓋シ代議官ヲ撰舉スルヤ才能ヲ具備セサル人民多キヲ以テ其撰ニ當リタルモ爲政ノ能ニ乏シケレバナリ

以上掲ケタルハ皆十卓絶ノ人ノ稱道シタル所ナリト雖モ之ヲ反論スレハ亦其欠ナキニアラス惟事冗長ニ流ル、ヲ以テ茲ニ之レヲ止メ而シテ我憲法ノ所定ニ及ハン我カ憲法ハ皇族華族及ヒ敕任セラレタル議員即チ國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル者ヨリ特ニ勅任セラレタル者各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ多額ノ

直接國稅ヲ納ムル者ノ中ヨリ一人ヲ互撰セシメテ勅任セラレタル者五種ノ人ヲ以テ貴族院ト爲シ其組成ヲ爲シタリ是ニ由テ之ヲ觀レハ吾カ憲法ノ制ハ甲乙庚ノ三説ヲ折衷シタルモノ、如シ因テ其三説ヲ再演シテ其注意ノアル所ヲ知ル可シ

抑モ貴族院ノ制ハ源ヲ英國ニ發シ其奔流スル所大陸諸國ニ及ヒタルモノナリ然レモ之カ流ヲ汲ミタル國ト雖モ國土必ス英國ト相似タルモノ、ミニアラザレハ多少ノ變更ヲ加ヘテ以テ各其効益ヲ享ケタリ而シテ常ニ英國憲法ヲ解クモノハ貴族ハ君民ノ間ニ立チ相互ノ侵掠ヲ防遏シ相扶持シ上下ノ權衡ヲ保持スルハ貴族ニ若クハナシ貴族ハ君民間ノ屏扞ナリ故ニ別

ニ上院ノ一局ヲ立ツルハ本國ノ利益ナリ然レモ世襲ノ貴族ハ世故ニ暗ク且ツ富有ニ安ンシ活潑勇爲ノ氣象ニ乏シク其勢ヒ軟弱ニシテ獨立シ難ク或ハ王家ニ偏シ或ハ民庶ニ偏シ自己ノ情欲ニ從ヒ君權ヲ抑ヘ民權ヲ壓シ却ツテ國家ノ危殆ヲ招クノ恐レアリ是ヲ以テ英國ニ於テハ國王ノ特撰ヲ以テ一代貴族ヲ以テ世襲貴族ノ不足ヲ補ヒ以テ此ノ弊ヲ防キタリ獨リ英國ノミナラス佛國、宇國、澳國等ニ於テモ亦之レヲ施行シタリキ我カ國ノ貴族ノ如キハ其弊ヲ生スルノ患ナカルベシト雖モ抑モ憲法ハ永遠不磨ノ大典ニシテ萬世ノ長計ナラザル可カラサルヲ以テ豫メ其弊ノ一ヲ防グノ法ヲ設ケザル可テズ是レ即チ貴族ノ外別ニ勅撰

議員ヲ置キタル所以ナリ又富家壹人ヲ勅撰スルハ蓋シ富豪ノ工業商業家ノ如キハ財産ニ富メルノミナラス政治ノ思想ヲ具ヘ國家ニ忠愛ニシテ名望ヲ有スルモノナルカ故ニ貴族ト共ニ君民間ノ屏扞ト爲ルノ分子タルニ足ルヲ以テノ故ナランカ然レモ恐ラクハ世ノ富豪家ナルモノハ貧窶ヨリ起リ巨萬ノ富ヲ致シ政治思想ノ涵養モナク又國家ニ忠愛ノ心ニ乏シキモノナキヲ保セス故ニ十五ノ富豪ヲ互撰シ更ニ勅任スルノ條件ヲ附セラレタルニハアラサルカ

學術ハ高尚ナル精神上ノ勢力ヲ有シ大ニ政治上ニ効用アルモノニシテ又臣民ノ國家ニ功勞アルモノハ其才德社會ノ公事ヲ執ルヲ以テ保証シ得可ク又其實歴

ヲ以テ之レヲ鞏固ナラシム可ク能ク此ノ二者ノ勢力輿論ヲ制シ偏セス倚セス政治ノ方針ヲ善良ニシ皇室ト衆議院ノ調和ヲ爲スノミナラス衆議院ヲ相箝制シテ常ニ善良ノ方針ニ導ク可シ然レモ此ノ二者ノ効德著シキヲ以テ悉ク之レヲ貴族院ノ議員ト爲ス可カラス何トナレハ悉ク國王ノ勅撰ヲ以テ之レニ充ル時ハ其威福ヲ專ラニスル恐レアルハ假ヘ多識多才ノ士ト雖モ免レサルノ通弊ナレハ世襲ノ議員ヲ折衷シテ此ノ弊ヲ矯メサル可カラサルヲ以テ勅撰議員ハ世襲議員ノ半ヲ超過ス可カラスト爲シタル所以ナラン

以上三者ヲ折衷シ以テ貴族院ヲ組成セハ互ニ其短ヲ控制扶助シテ以テ上院即チ貴族院ニ望ム所ノ性情ヲ

全フシ上陛下ニ對シテ至誠ノ獻獻ヲ怠ラス下衆議院
ヲ箝制シテ協贊ノ道ヲ誤ラサラン是レ陛下欽定ノ憲
慮ノアル所ナラント思考ス
法文ニ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ云々ト其組成ノ方
法及ヒ撰舉等ノ事ハ小節目ニシテ此ノ不磨ノ大憲ニ
於テハ唯其組織ノ範圍ヲ示シ其餘ハ勅令ヲ以テ之レ
ヲ定ムルノ意ヲ示シタルモノナリ

第三十五條

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セ
ラレタル議員ヲ以テ組織ス

本條ハ前條ト其規定ノ方法ヲ異ニシ議員ノ分限ヲ茲
ニ規定セス蓋シ衆議院ハ國民一般ヲ代表スル者ニシ
テ議員ノ撰被撰ノ權ヲ普ク國民全體ニ及ホスヲ以テ

政治ノ眞ノ原則トセサル可カラズ故ニ憲法ハ茲ニ之
レヲ示スコトヲ爲サスシテ選舉法令ニ護リタルモノ
ナラン故ニ苟モ議員ニ撰ハレ議場ニ立ツモノハ全國
民ヲ代表スルモノナレバ常ニ眼ヲ吾カ國全局面ニ注
キ事ニ方ツテ全國民ノ心ヲ心トセサル可カラズ而シ
テ今茲ニ吾カ撰舉法令ヲ概括シテ解釋シ置クハ不要
ニモアラサル可シ

- 第一 撰舉區
- 第二 撰舉人ノ資格
- 第三 被撰人ノ資格
- 第四 撰被撰人ト爲ルヲ得サル事項
- 第五 撰舉手續

第六 議員ノ任期

以上ハ吾カ撰擧法ノ含ム所ノ要部ナリ

(一) 撰擧區ハ區郡ノ一區若クハ數區或ハ一郡若クハ數郡ヲ合シテ一撰擧區ト爲シ其區内ニ於テ一人若クハ數人ヲ撰擧スル方法ナリ是レ代議士ヲ撰擧スルニ全國ヲシテ一轍ナラシメ而シテ其撰擧ヲ便ナラシムルノ意ニアル可シ

然レモ撰擧區ノ設ケニ關シテハ古來利弊ヲ説クモノアルヲ以テ茲ニ其論旨ヲ示サンブルンチエリト氏曰ク撰擧區ヲ設ケテ其住民ヲシテ若干ノ代議士ヲ分撰セシムルハ住民ノ職業等級等固有ノ差別アルニ關セズ之ヲ撰擧セシムヲ以テ多數ノ者其撰擧ニ與リ少數

ノモノハ之レニ與ラサルノ實況アリ故ニ未タ以テ民撰代議制度ノ完全ヲ致シ眞理ヲ窮メタリト云フヲ得ズ是ヲ以テ國民中概テ其ノ思想及ヒ利益ヲ同シクスル等級ニ從ヒ撰擧ヲ爲スルハ夫ノ衆庶混同ノ撰擧ニ比スレハ大ニ優ル所アリ然レモ未タ等級區分ノ方法ヲ審ニセス且ツ等級ヲ分ツハ中世ノ等族ヲ再興スルノ恐アリ又國民ノ心ヲ統一スル能ハサルト眞ノ權利ノ平等ヲ害センコトヲ恐レテ未タ世ニ信用セラレサルナリト云ヘリ又英國ノ學者トーマスハール曰ク國民一般ヲ合シテ一撰擧區ト爲シテ以テ當選者ヲ定ム可シト此ノ論タル大ニ理論ニ適ス可キモ未タ之レカ實行ヲ何レノ國ニモ見ルコトナク願ミテ其實況ヲ推量

セハ却テ其精ヲ欠クノ恐レアリ何トナレハ其撰舉區ノ廣汎ナルカ爲メニ傳承ノ名聲ヲ信シテ眞任ヲ欠ク可キヲ以テナリ

(二) 吾カ撰舉法ノ定ムル所撰舉人ノ資格ハ即チ左ノ條件ヲ備ヘタルモノトス

第一 年齢滿二十五歳ノ日本臣民ノ男子

第二 撰舉人名簿調製期日ヨリ前滿一年以上府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居シ仍ホ引續キ住居スル者

第三 撰舉人名簿調製期日ヨリ前滿一年以上其ノ府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者

右ノ規定ニ從ヘハ有限撰舉ニシテ彼ノヘンザム氏等

ノ主張シタル普通撰舉ニ反スル所ノ方法ヲ採リタルモノナリ普通撰舉ヲ主張シタル其旨趣ヲ要スルニ男女長幼貧富ヲ分タス人皆一國政治ノ下ニ立チ直接間接ニ國費ヲ負擔シ國家ヲ扞衛スルノ義務ヲ盡シ未タ貧困ナルノ故ヲ以テ此ノ義務ヲ辞スル能ハサルニ何ノ咎アツテ國政ノ商議ニ與ルヲ得サルカ是レ豈ニ代議ノ原則ニ適センヤ宜シク富豪ヲシテ專有セシム可ラスト然レモ此ノ説ヤ一見善美ナリト雖モ其弊亦免ル可カラズ貧人ハ概チ政治思想ニ乏ク撰舉權ヲ尊重セサルヲ以テ遂ニ資産家ノ暗利ノ爲メニ其私鬪ニ應シ却ツテ有限撰舉ヨリモ甚シキ一部ノ專有ニ屬スルヲ見ル可シ縱ヒ撰舉權ヲ重スルモノトスルモ常ニ貧

人ノ富人ヲ羨ムハ自然ノ情ニシテ終ニ虛無ノ説ヲ放チ
 富民ヲ凌駕シ賤民擅治ノ實ヲ惹クニ至ル可シ是ヲ以
 テ歐米諸國ニ於テモ概テ其選舉權ヲ有限ト爲スモノ
 多シ然リ而シテ我カ有限法ニ於テ第一年齢ヲ制限シ
 タリ年齢ヲ制限スルハ普通選舉ヲ主張シタル者ト
 雖モ未ダ曾テ同意セサルモノナシ是レ喋々ノ辨ヲ要
 セスシテ其理ヲ知ル可シト雖モ男子ノミニ之ヲ附與
 シ女子ニ之レヲ與ヘサルハ獨リ我カ國ノミナラス各
 國皆然リ然レモ近頃間々女權伸張ヲ主張シ其不利ナ
 ルヲ説クト雖モ未ダ世人一般ノ信ヲ惹カス且此ノ論
 ノ如キモ其名ノ美ノミニシテ其實ヲ見ルハ未ダ期
 ス可ラス茲ニ以テ我カ國モ亦之ヲ附與セサルニアル

カ第二其府縣内ニ本籍ヲ定メ住居スルモノナルヲ以
 テシタリ是レ普通選舉ト雖モ要ス可キノ條件ナレ
 ハ此ノ點ニ付テ異論アリシヲ聞カス第三ハ資産ノ多
 寡ヲ以テ其目的ト爲シタルカ如シ而シテ其財産ヲ以テ
 制限ヲ置クノ可否ハ已ニ前ニ述タリ然レモ其限度ニ
 至リテハ邦國ニ依ツテ情勢ヲ異ニシ多キニ失スレハ
 一種族ノ專有ニ屬ス可ク少キニ失スレハ貧民痴漢ノ
 勝ヲ制スル所トナル可シ今本邦ノ制定ハ其當ヲ得タ
 ルヤ否ニ至ツテハ自ラ説アリト雖モ今漫ニ當否ヲ議
 ス可キ所ニアラサルヲ以テ他日ニ譲ラン

(三) 被選人ノ資格ハ左ノ條件ヲ具備シタルモノナリ
 トス

被選人ノ資格ナキ者

- 第一 日本臣民ノ男子ニシテ滿三十歳以上ノ者
 - 第二 選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其撰舉府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍ホ引續キ納ムル者
- 又被選人ノ資格ヲ有セサルモノハ左ノ如シ
- 第一 宮内省官吏裁判官會計檢査官收稅官警察官
 - 第二 神官及諸宗ノ僧侶教師
- 又或ル部分ニ付テ被選人ノ資格ナキモノハ左ノ如シ
- 第一 府縣郡吏其管轄地内ニ於テ
 - 第二 選舉ニ關スル市町村吏其撰舉區ニ於テ
- 日本臣民ニアラサレハ議政ニ關シテ誠忠ナラス又年齒長スレハ世故ニ長スルヲ以テ年齒制限ヲ置キタル

ト其國民ニ限リタルハ未タ異論アルヲ聞カサレ且財產品等ヲ置クコトハ古來學者ノ議スル所ナリ其主ナル説ハ富有ノ徒ハ概チ安逸遊惰ニシテ有爲ノ才力ニ乏シク能ク政事家タルノ才學ヲ修ムル難シ故ニ勢之ヲ無産ノ徒ニ求メサル可カラス是レ其品等ヲ立ツルノ不可ナル所以ナリト之レニ反スルモノ曰ク議官タルモノハ自立ニシテ他ノ啗利誘惑ヲ受ク可ラサルヲ以テ宜シク恒ノ産アルモノヲ以テセサル可ラスト本邦ノ制后者ノ説ヲ探ルモノ、如シ

又官吏ヲ議員トスルコトニ付テハ若シ多數ナル時ハ或ハ議院ノ獨立ヲ妨ケルコトアリト雖モ若シ少數ナル時ハ事務練達ノ識士ヲ加ヘ議場ノ見識ヲシテ值アラシ

被選人ト爲ル能
ハサル者

ム可シ殊ニ我カ國ノ如キ民間未タ眞ノ政事家ニ乏シ
 キ時代ニ於テハ之ヲ禁ス可カラス然レモ彼ノ裁判官
 警察官ノ如キ公平ヲ維持スルモノニシテ政治ノ黨派
 ニ心ヲ傾クルハ却ツテ害アルモノナルヲ以テ之レニ
 被撰權ヲ與フ可カラス

(四) 左ノ事項ノ一ニ該當スルモノハ撰被撰人トナル
 コヲ得ス

第一 瘋癲白痴ノ者

第二 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第三 公權ヲ剝奪セラレ又ハ停止中ノ者

第四 禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ后又ハ赦免ノ後滿
 三年ヲ經サル者

第五 舊法ニ依リ一年以上ノ懲役若クハ國事犯禁獄
 ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サ
 ル者

第六 賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ
 後滿三年ヲ經サルモノ

第七 選舉ニ關ル犯罪ニ由リ選舉權及被選權停止中
 ノ者

以上ハ概テ其者ノ瑕瑾ヲ擧ケ選被選ノ信用ノ欠亡ヨ
 リ來リタルモノナリ

第八 現役及ヒ休職停職ノ陸海軍軍人

第九 華族ノ當主但シ衆議院議員ノ撰被撰ニ付テ

第十 刑事ノ未決拘留保釋中ノ者ニシテ其裁判確定

選舉ノ手續

マテ

- 以上三ノ者ハ安寧ノ爲メ或ハ議院區界ノ擾亂ヲ防キ
- 若クハ議院ノ信用ヲ維クニアル可シ
- (五) 選舉ノ手續ハ左ノ項目ヨリ成ル
- 第一 選舉人名簿
- 第二 選舉期日
- 第三 投票所
- 第四 投票
- 第五 選舉會
- 第六 當選人
- 第七 補欠撰舉
- 第八 投票所取締

議員ノ任期

第九 當選訴訟

第十 罰則

以上ハ選舉ノ手續ニシテ今一々解釋ヲ下スハ却ツテ冗長ニ涉ルヲ以テ看官其逐條ニ於テ法意ヲ知ル可シ

(六) 議員ノ任期ニ付テハ少シク演釋ヲ要ス可キモノアリ何ツヤ曰ク任期ハ或ル時期ヲ定ム可キ乎又其時期ハ何レノ程度ニ置ク可キヤ又其改選ハ一部トスベキヤ全部トスベキヤ是レナリ

任期ニ於テ時期ヲ定ムルハ議員撰舉ノ目的ニ協フ可シ何ントナレハ若シ之レヲ終身ト爲サハ社會ノ意ニ反スル議員ヲ生スルモ能ク之ヲ改撰スル能ハサレハナリ又他ノ一方ヨリ見レハ議員タルモノ社會ノ意思

ニ反シテ私曲ヲ恣ニスレバ其在職ノ一期ニ終ランコ
 ヲ恐レ内ニ願ミテ能ク其任ヲ盡ス可ケレハナリ是ヲ
 以テ任期ヲ盡スルハ古來各國概テ同一ニ出ツル所ナ
 リ惟其時限ノ長短ニ至ツテハ學者ノ述ル所モ區々ニ
 ノ又各國ノ典例モ一ナラスヘンザム氏ハ毎年改撰ヲ
 主張シタリ是レ不能議官ノ排除ヲ爲スノ點ヨリ論ゼ
 シモノナリ又或人ハ二年ヲ以テ改撰スルヲ適當トス
 其主旨長短ニ失セサルノ信用ヨリ來レリ英國ノ保守
 黨ハ七年改選ヲ主張シタルコト之レ其黨ノ主義ヨリ由
 來セシナリ而シテ英國下院ハ惹爾日第一世ノ後ハ七年
 ヲ以テ任期ト爲シ其以前ハ三年ヲ以テシタリ普魯士
丁抹瑞西ハ各三年ヲ以テ改撰ス白耳義ハ四年ヲ以テ

任期トシ其一半ヲ毎年改撰シ米國ハ二年ヲ以テ改撰ス
 以上述タル如クナレハ吾カ國ニ於テ四年ヲ以テ任期
 ト爲シタルハ蓋シ長短ニ失セサルノ目的ニ出タルモ
 ノナラン何ントナレハ凡ソ事業ハ朝出暮改ノ如ク變
 更頻煩ナル所ハ能ク成ルコトナガル可ク然レモ其長キ
 ニ失スル所ハ不能不其ノ議員ヲシテ長ク位置ヲ保タ
 シムルノ恐レアレハナリ

終リニ臨ミ改撰ノ事之レナリ彼ノ比國ノ如キハ每半
 數改撰ヲ以テシタリ其說ニ曰ク半數ヲ改撰スルハ議
 員ヲシテ人民ト疎遠離隔シタル一種族タラシメス衆
 論公議ヲ代表スル代議士ヲ出サシムルニ在リト此說
 未タ全カラス夫レ然リ然ラハ何ソ半數ノミナランヤ

全數ヲ改撰スルニ躊躇セサル可シ或ハ曰ク熟練ノ議員繼續スルモノナキ時ハ治理ヲ切斷シテ目的ヲ達ス可カラズ然レモ議會ハ常ニ社會ヲ代表スルモノナレハ社會其治理ヲ繼クノ意ナキハ勢之ヲ切斷セサル可カラズ強テ之ヲ繼續セシムル時ハ衆議公論ニアラサルナリ況ンヤ議員ハ重任ヲ禁セサル以上ハ改撰ハ必ス新撰ノ人ナルコトヲ期ス可カラズ且ツ前議會ノ代議ヲ以テ社會ノ意ニ適スルモノト爲サハ前年期ノ議員ニ再撰スルニ躊躇セサル可シ我カ法モ全數改撰ニシテ再撰ヲ許サレタルハ此ノ意ニ出タルモノナラン

第三十六條

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ス

已ニ第三十三條ニ於テ解說シタル如ク兩院各々特有ノ性質ヲ以テ帝國議會ヲ組成シ以テ政治ノ中和ヲ得ントス然ルニ同時ニ兩院ノ議員タルコトヲ得セシムルニ至ツテハ其尊重シタル特性紊亂シテ互ニ箝制シテ平衡ヲ得ルコトハ望ムヲ得ヘカラス終ニ各議員控制ナク憲法ノ豫期ニ反スルニ至ル可シ又願ミテ之ヲ事實ニ徵スルニ第四十四條ニ帝國議會ノ開會閉會々期ノ延長及停會ハ兩院同時ニ之ヲ行フ可シトアリテ實際兼任ハ爲シ得ラレサル可シ故ニ撰舉法第十六條ニ華族ノ當主ハ衆議院議員選舉人及ヒ被選人タルコトヲ得スト規定セリ以テ憲法ノ意ノアル所ハ知ルヲ得可キナリ

第三十七條

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ協賛ヲ經ルヲ要ス

法律タルノ條件

本條ハ法律成立ノ要件ノ一ヲ指定シタルモノニ即チ第五條ニ於テ陛下カ立法權ヲ行ヒ給フニ付テ帝國議會ノ協賛ヲ要スル旨ヲ定メ陛下親ラ其權限ヲ限定セラレ而シテ此ノ原則ニ基キ制立セラル、所ノ法律ハ帝國議會即チ貴族院衆議院ノ兩院ニ於テ可決シ其協賛セサル所ノ法律ハ法律ニアラサル旨ヲ指示シタルモノナリ故ニ假令其法律ハ貴族院ノ可決協賛スルモ衆議院ノ否決シテ協賛セサル時又ハ衆議院ノ可決協賛スルモ貴族院ノ否決シテ協賛セサル時ハ假リニ陛下ノ裁可アリトスルモ法律タルノ効ナキナリ是ヲ以テ兎レハ法律ト稱ス可キモノハ左ノ條件ヲ具備スル

モノタル可シ

第一 適法ノ立案

第二 帝國議會即チ兩院ノ可決協賛

第三 陛下ノ裁可

第四 法律ノ發布

右ノ四要件ヲ具備シテ始メテ憲法ニ適スル完全ノ法律トナル可シ故ニ第一第二ノ一ヲ欠カハ陛下ノ裁可ヲ與ヘサル可ク第三即チ陛下ノ裁可ナク且第四ヲ欠キタル法律ハ政府及ヒ裁判官ハ遵奉セサル可ク又第一第二第三第四ノ一ヲ欠キタル法律ハ人民之ニ服従スルヲ拒ムノ權アル可シ

第三十八條

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ

及各々法律案ヲ提出スルコトヲ得

法案ノ編制ハ議會ノ議決ノ根幹ニシテ法律ハ實ニ茲ニ胚胎スルヲ以テ其編制ノ精緻ナラサル時ハ後來之ヲ議定スルニ方リテ改良増減スルハ誠ニ難キヲ以テ此ノ任ニ當ル者ハ全局ノ大勢ニ通シ政務ニ熟練ナルニ非レハ後來法律ノ成案ヲ完備ナラシムル能ハス古來學者ハ概テ此ノ立按ヲ擧ケテ議院ニ附ス可キヲ主張シメリ其ノ説ク所ハ宜シク立案ノ權ヲ擧ケテ議院ニ付與ス可シ何トナレハ議會ノ知見ヲ改良シ之ヲ社會ノ公益ニ適用シ行政官ノ惡弊ヲ矯メ或ハ行政官ノ立案ニ對シ無益ノ反對ヲ避クルヲ得可シト云フニ在リ然レモ其所説ヲ含味スル時ハ強チ議院ニ附與

スルヲ眞理ナリト説クモノニアラサルカ如シ何ントナレハ其理由トスル所ハ若シ立案ノ權ヲ擧ケテ行政官ニ歸セシメバ議會ノ知見爲ニ棄却セラレ議會ノ良見其効ヲ爲シ難ク又行政官ノ惡政ヲ爲スモ其箝制チキチ以テ之ヲ矯ムルヲ得ス終ニ議會ノ權力ヲ示サシカ爲メニ行政官ノ立案ヲ全廢シ其良案ヲモ願ミサルニ至ル可キヲ以テナリ然リト雖モ此論者ニ於テモ政事ノ煩雜ニシテ須臾ノ考案能ク周到ナルモノニ非シテ其効ヲ奏ス可キモノニ非ス必ス全局ニ通シ大勢ヲ詳カニスルモノ、之ニ適スル法律ヲ立テ其目的ヲ全カラシム可ク之ヲ全カラシムルモノハ常ニ其執行ノ任ニ當リ肯綮ヲ詳ニスルモノハ行政官タルトハ同

意ヲ表スル所ナリ
 抑モ吾カ憲法ハ立案ノ事ニ於テハ本体ヲ政府ニ與ヘ
 變例ヲ議院ニ與ヘタリ是レ蓋シ社會全局ノ大勢ヲ詳
 ニシ之ニ應スルノ法案ヲ立ツルハ行政官ノ能ク爲ス
 所ナルヲ以テ其立案ノ本体ヲ政府ニ與ヘシモ若シ夫
 レ議院ヲシテ立案スルヲ禁止セハ前者ノ述ル所ノ
 弊ヲ來ス可キヲ以テ之ヲ箝制スルカ爲メニ立案提出
 ノ權ヲ附與シテ以テ其中和ヲ得セシムルカ爲メナラ
 シ
 法文ニ政府ノ提出スル法律案ヲ議決スト記シテ特ニ
 政府ノ文字ヲ用ヒタルハ須ラク解釋ヲ要ス可キモノ
 トス夫レ天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其開會閉會ノ大令

ヲ發シ給フト雖モ議案ノ提出ハ國務大臣ヲシテ之ヲ
 爲サシム蓋シ其主旨ハ已ニ述タル如クナラン其他議
 案ノ質問ニ對スル答辯等凡テ國務大臣ヲシテ其責ニ
 當ラシムルヲ以テ之ヲ政府ノ提出云々ト示シタルニ
 由ル可シ

**第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同
 會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス**

本條ハ貴族院衆議院ニ於テ政府ノ提出シタル法律案
 若クハ各議院ノ呈出シタル法律案ヲ討論議定スルニ
 方ツテ假令一院ニ於テ之ヲ可決スルト雖モ他ノ一院
 ニ於テ否決スル時ハ其會期中再ヒ之ヲ議案ト爲ス
 ヲ禁シタルノ法條ナリ其所以ヲ解スルニ其主意ハ左

第三十九條
 兩議院ノ一ニ於
 テ否決シタル法
 律案

ノ旨趣ニ由ルモノナラン
 第一 議院ノ權利ヲ重ス
 第二 會期ノ延滞ヲ禦ク
 聊カ之ヲ辨センニ議會ハ國民ノ代表者ニシテ政事ヲ
 商議シ法律章程ヲ可否シ一面行政司法ノ二官ヲ監視
 スルモノナレハ上至尊ヲ除ク外立法上最上ノ職務ニ
 任スルモノニ以テ實ニ天皇ノ立法權ヲ行フニ方リ議
 會ノ協賛ヲ要件ノ一トセラレタルモ亦理リナリ夫レ
 如斯重任ヲ負フモノハ隨テ尊重ナラサル可カラス否
 ラサレハ議會ノ價直地ニ墮チ延テ法律ノ信ヲ欠クニ
 至ル茲ヲ以テ若シ兩院ノ一ニ於テ其提案ヲ否決セシ
 ヲ再ヒ議題ニ掲ケ強テ同意ヲ迫ル如キハ國民ノ意思

ヲ枉ケシムルニ異ナラサルノミナラス却ツテ否決ノ
 適理ニ非ラサルヲ以テ迫ルニ等シク其議院ニ向ツテ
 恥辱ヲ與フルニ同シ是ヲ以テ兩院ノ一ニ於テ否決シ
 タル提案ノ再出ハ其議院ノ体面ヲ毀損スルカ爲メニ
 之ヲ許サミルモノナリ然レモ國家ハ常ニ進運ヲ期ス
 ルモノナルヲ以テ歲月ヲ闕ミスルモ必ス所見ヲ換ヘ
 サルモノニアラス時ノ情勢ト必要ニ從ヒ變遷ナキ能
 ハス是ヲ以テ其制限ハ之チ一會期ニ止メタル所以ナ
 リ
 爰ニ一ノ詰問ヲ爲スモノアリ兩院之ヲ可決シタルモ
 陛下ノ裁可ヲ得ル能ハサル時ハ再ヒ提案ト爲スコトヲ
 得可キヤト是レ提案ト爲スコトヲ得スト決セサル可カ

ラス何トナレハ至尊ノ主權ニ於テ之ヲ認可スル能ハ
 サルモノト決スルヨリ之ニ裁可ヲ與ヘサルモノナレ
 ハ議會ノ見識スラ之ヲ尊重セサル可ラサルニ況ンヤ
 至尊ノ大權ヲ侵スコトヲ得可ケンヤ
 第二 提案ヲシテ循環極リナキモ之ヲ禁止スルコト
 ノハ實ニ一案ノ爲メニ會期ヲ尽スモ尙ホ未タ足ラサ
 ルニ至リ他ノ提案ヲ議定スルノ暇ナク遂ニ會期ヲ延
 滞シ國幣ヲ糜シ其効用ヲ見ルコトナキニ至ル可キヲ以
 テナリ

第四十條
 兩議院ノ建議權

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其他ノ事件ニ付各々其意
 見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サル
 モノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス

本條ハ法律又ハ行政ニ關シテ各議院ヨリ其所見ヲ政
 府ニ建議スルヲ得ル權ヲ與ヘタリ而シテ建議ヲ採納ス
 ルハ陛下ノ勅命ニアラスシテ政府ノ權内ニ存スルヲ
 以テ特ニ又政府ノ二字ヲ以テシタルモノナラン抑モ
 此ノ權ヲ與ヘラレタル理由ヲ推考スルニ兩院ハ行政
 ニ參與スルノ權ヲ有セス然レモ行政ヲ監視スルニ於
 テハ廣大ナル職權ヲ有スルモノニシテ政治ノ果シテ
 能ク法律ニ遵フヤ否ヤ能ク人民ニ適スルヤ否ヤヲ評
 議スルハ立憲政体ニ於テ最良ノ機關トスル所ナリ而
 レモ立憲君主政治ハ多數人民ノ政柄ヲ秉ルコトヲ許
 サスシテ人民ヲシテ善美ノ政治ノ下ニ立ツヲ得可キ
 權利ヲ與ヘタルモノナリ是ヲ以テ若シ夫レ法律上又

ハ行政上ニ於テ人民一般ノ意向ト反スルモノアル時
ハ改正ヲ求メ若クハ忠告シテ其救済ヲ促ス等輿論ヲ
提出シテ以テ之レカ箝制ヲ爲サシメ以テ政治ノ中和
ヲ得ントスル聖意ニ外ナラサルナリト思考ス
其方法ニ至ツテハ或ハ之ヲ法律ノ成案ト爲シテ提出
スルコトアリ或ハ單ニ其所見ヲ陳スルニ止ルコトアル
ノ二種ナリ

本條モ亦前條ト等シク建議ノ採納ヲ得サルモノハ同
會期中再出ヲ許サス其所以ハ蓋シ前條ト異ナリ左ノ
理由ニ外ナラザラン

第一 紛議ヲ豫防ス

第二 強迫ヲ豫防ス

建議ノ一タヒ納レラレサルハ仍ホ再三之ヲ提
出スルコトヲ得バ自己ノ所見ヲ達センカ爲メ強ヒテ其
是非ヲ論シ目的ヲ遂ケントシ終ニ政府ト紛争ヲ醸ス
ノ恐レアルヲ以テ再三スルヲ禁止シタルモノナル可
ク又再三スルヲ得セシメハ議院ハ輿論ノ勢力ヲ借リ
遂ニ政府ニ強迫シテ其意ヲ遂ケントスルノ恐レアル
ニ由ル可キナリ

第四十一條 帝國議會ハ每年之ヲ召集ス

第四十二條 帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス必要ア
ル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

此ノ二條ハ我憲法ノ主意ニ於テ議會ハ會期ヲ立ツル
ヲ以テ是トセラレタルヨリ設ケラレタルモノナリ

第四十一條
第四十二條
帝國議會ノ會期